弘安三年十月二十一日　　日蓮御花判

尾張刑部左衛門尉殿女房御返事

小蒙古御書

小蒙古の人、大日本國に寄せ來るの事。我門弟竝びに檀那等の中に、若佗人に向ひ、將た又自ら言語に及ぶ可らず。若此旨に違背せば、門弟を離す可き等の由、存知する所也。此旨を以て人々に示す可く候也。

弘安四年六月十六日　　日蓮御花判

人々御中

南條殿御返事

御使の申し候を承はり候。是の所勞難儀のよし聞へ候。いそぎ療治をいたされ候ふて、御參詣有るべく候。

鹽一駄。大豆一俵。鷄冠菜一袋。酒一筒給び候。上野の國より御歸宅候ふ後は、未だ見參に入らず候。牀敷存じ候ひし處に、品々の物ども取り添へ候ふて、御音信に預り候事、申し盡し難き御志にて候。今申せば事新しきに相似て候へども、德勝童子は、佛に土の餅を奉りて、阿育大王と生れて、南閻浮提を大體知行すと承はり候。土の餅は物ならねども、佛のいみじく渡らせ給へば、かくいみじき報ひを得たり。然に釋迦佛は、我を無量の珍寶を以て、億劫の間供養せんよりは、末代の法華經の行者を一日なりとも供養せん功德は、百千萬億倍過ぐべしとこそ、說せ給ひて候に。法華經の行者を心に入れて、數年供養し給ふ事、有り難き御志哉。金言の如んば、定めて後生は靈山淨土に生まれ給ふべし。いみじき果報なる哉。其上此處は人倫を離れたる山中也。東西南北を去りて里もなし。かゝるいと心細き幽窟なれど

も、教主釈尊の一大事の秘法を、霊鷲山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は、諸佛入定の處なり。舌の上は轉法輪の所。喉は誕生の處。口中は正覺の砌なるべし。かゝる不思議なる法華經の行者の住所なれば、いかでか靈山浄土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊しと申すは是也。神力品に云、若は林の中に於ても。若は樹の下に於ても、若は僧坊に於ても、乃至而般涅槃し給ふと云云。此砌に望まん輩は、無始の罪障忽に消滅し、三業の惡轉じて三德を成ぜん。彼中天竺の無熱池に臨みし惱者が、心中の熱氣を除癒して、充滿其願如清涼池とうそぶきしも、彼此異なりといへども、其意は爭でか替るべき。彼月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也。參詣遙に中絶せり。急々に來臨を企つべし。是にて待ち入つて候べし。哀れ哀れ申し盡し難き御志かな。御志かな。

弘安四年九月十一日

南條兵衛七郎殿御返事

日蓮御花判

波木井殿御報

畏み申し候。道の程別事候はで池上まで著て候。道の間、山と申し、河と申し、そこばく大事にて候ひけるを、公達に守護せられまゐらせ候て、難もなくこれまでつきて候ふ事、おそれ入り候ながら、悦び存じ候。さては、やがて歸り參り候はんずる道にて候へども、所勞の身にて候へば、不定なる事も候はんずらん。さりながらも、日本國に衆多もてあつかうて候ふ身を、九年まで御歸依候ひぬる御心ざし、申すばかりなく候へば、いづくにて死に候ふとも、墓をば身延の澤にせさせ候べく候。又栗鹿毛の御馬は、あまりおもしろく覺え候ふ程に、いつまでも失なふまじく候。常陸の湯へひかせ候はんと思ひ候ふが、もし人にもぞとられ候はん。又其外いたはしく覺へば、湯より歸り候はん程、上總の藻原殿のもとにあづけおき奉るべく候ふに、しらぬ舍人を付けて候ふては、覺束なく覺え候。まかり歸り候はんまで、此舍人をつけおき候はんと存じ候。そのやうを御存知のために申し候。恐々謹言。

弘安五年九月十九日

波木井殿御報

日蓮御花判

進上　波木井殿　御侍

波木井殿御書

日蓮は日本國人王八十五代後堀河院の御宇、貞應元年壬午安房の國長狹の郡東條郷の生れ也。佛の滅後一千百七十一年に當る也。八十六代四條院の天福元年癸巳十二歳にして清澄寺に登り、道善御房の坊に居て學文す。時に延應元年己亥十八歳にして出家し。其後十五年が間、一代聖教總じて内典外典に亘りて殘りなく見定め。生年三十二歳にして、建長五年癸丑四月二十八日、念佛は無間の業なりと見出しけるこそ時の不祥なれ。如何せん此法門を申さば誰か用ふべき、返て怨をなすべし。人を恐れて申さずんば、佛法の怨となりて大阿鼻地獄に墮つべし。經文には末法に法華經を弘むる行者あらば、上行菩薩の示現なりと思ふべし。言はざる者は佛法の怨なりと佛說き給へり。經文に任せて云ふならば、日本國は皆一同に

日蓮が敵と成るべし。釋迦佛は娑婆に八千度生れ給ひしに、尸毗王とありし時は、鳩の命にかはり。薩埵王子とありし時は飢えたる虎に身を與へ。雪山童子たりし時は半偈の爲に身を投げ。堅誓師子とありし時は獵師に殺され。千頭の鹿王となりては我身を獵夫に射させて、妊胎の鹿を助け。三千大千世界に我身命を捨て置き給はざる處なし。此功德は皆一切衆生の中には、法華經を信ずる人々に與へんと誓ひ給ひき。我不愛身命の法門なれば、命を捨て、此法華經を弘めて、日本國の衆生を成佛せしめん。讒の小島の主君に恐れて是を云はずんば、地獄に墮ちて閻魔の責をば如何せん。國主の用ひ給ふ禪は天魔なる由。鎌倉殿の用ひ給ふ眞言の法は、亡國の由。極樂寺の良觀房は、國賊なる由。淨土宗の無間大阿鼻獄に墮つべき由。其外餘宗皆地獄に墮つべき由。一々に記し、立正安國論を作り、宿谷の禪門を使として、最明寺殿の見參に入れ奉る。此は生年三十九の文應元年庚申の歳也。日蓮が立て申す法門を一偈一句も答ふる人一人もなし。上下一同に惡くみ嫉みて讒奏申すに依りて、生年四十、弘長元年辛酉の歳五月十二日には、伊豆の國伊東の莊へ配流し、伊東八郎左衞門の尉の預りにて三箇年也。同き三年癸亥二月二十二日赦免せら

る。如來現在猶多怨嫉、況滅度後の法門なれば、日蓮此法門の故に怨まれて死なんことは決定也。今一度舊里へ下つて、親き人々をも見ばやと思ひて。文永元年甲子十月三日に安房の國に下つて三十餘日也。同き十一月十一日には、安房の國東條の松原と申す大道にて、申酉の時計りにて候ひしが、數百人の念佛者の中に取籠られ、日蓮は但一人、物の用にあぶべき者は讒に三四人候ひしかども、射る箭は雨のふるが如く、打つ太刀は電光の如し、弟子一人當座に打ち殺され候。又二人は大事の手を負ひ候ひぬ。自身計りは射られ、打たれ、切られ候ひしかども、如何に候ひけん打ち漏らされて鎌倉に登る。文永五年戊辰後の正月、蒙古國より日本國を襲ふべき由牒狀これを渡す。同じき十月に訴狀を書きて、重ねて法光寺殿の見參に入れ奉りしに、御祈禱申すべき由有りしかども、日蓮が云、建長寺極樂寺等の念佛者禪宗等が堂塔を燒き拂ひ、彼等が頭を山井が濱にて悉く切り失はるべく候。然らずんば只今此日本國の人々、佗國より責められ、同士打ちして自界叛逆の難あるべし。鎌倉中の持齊の僧を御供養候ふ事は、但牛を飼はせ給ふにてこそ候へと申したりしかば、日蓮房は鎌倉殿を牛飼と申し候ふと讒奏申すに依りて、文永八年辛未九月十二日には頸の座に登り、相摸の龍の口へ遣さる。今は最後と思ひしかば、御靈の宮の前にて馬をひかへ、熊王丸を使として、四條左衛門の尉に知せしかば、かちはだしにて馬の口に取り付きて、路すがら啼き悲んで、事實にならば腹を切らんとせしこころざしをば、何の世にかは忘るべく候。法華經に命を進らせ、日蓮より前に腹を切らんと思ひきりし事をば、釋迦佛先づ知食して候ふなり。既に頸切られんとせしが、其夜は延び候ひて、相摸の依智へわたされ、本間の六郎左衛門が預りおきぬ。明十三日の夜ふけ方に不思議現ず。大星下りて庭の梅の枝に懸りき。爾る故にや死罪を留められ流罪に行はれ、佐渡の國へ遣はさる。十月十日に相摸の依智を立ちて、同じき二十八日に佐渡の國へ著きぬ。本間六郎左衛門の尉が後見の家より、北に塚原と申して、洛陽の蓮臺野の樣に、死人を送る三味原の野邊に、垣もなき草堂に落著ぬ。夜は雪ふり風はげし、切れたる裝を著て夜を明かす。北國の習ひなれば、北山の巔の山をろしのはげしき風、身にしむ事をば但思ひやらせ給へ。彼國の守護も國主の御計ひなれば日蓮を怨む。其外萬民も皆其命に從ふ。鎌倉にては念佛者禪律眞言等が、一同に訴訟申して何れにも日蓮を鎌倉へかへさぬ樣にと計らひ、極樂等の良

觀房も、武藏の前司殿の私の御敎書を申し下して、弟子に持せて佐渡の國へ渡して怨をなす。其に隨つて地頭並に念佛者等が、日蓮が居たるあたりに、夜も晝も立ち添ひて、通ふ人を強にあやまたんとすれば、叶ふべき樣もなし。何より問ふべき人一人もなし。天の御計らひにてや候ひけん、阿佛房の日蓮を扶持せし事は、偏へに慈母の佐渡の國に生まれ替はらせ給ひて、日蓮が命を助け給ふ歟。漢土に沛公と申せし者あり。王此者を相辱めて、重ねて勅宣を下して、沛公をうつて進らせたらん者には。捕忠の賞を給ふべき宣旨ありしかば、沛公山邊に隱居して命助かり難かりしに、沛公が妻山邊に尋ね行きて、時々助け候ひき。彼は夫妻なれば年來の情捨てがたければ尋ねけん。此は佗人なれども、人目を隱れ忍びて日蓮を憐愍し、或は處をおはれ、或は過代を引きなんどせしかば、內々志ありし人も、何にとも申す人一人もなし。さすがに凡夫なれば、佗國に住みぬれば、古鄕の戀しき事申す計りなし。日蓮謬り無し、日本國の一切衆生を、佛に成さんと思ふ志こそなからめ。日本國の一切の男女等はさて置きぬ。禪僧、律僧、眞言宗、淨土宗の人々、日蓮を見たりしは、夜討、强盜、謀叛、殺害の人を見るよりも猶怖ろしげなり。されども法華經の正理なれば別の謬りなくて、佐渡の國にて四箇年と申せし。同じき十一年甲戌二月十四日に赦免せられ。同じき三月二十六日に鎌倉へ上りぬ。同じき四月八日に平の左衞門の尉が云、御房は法華經の法門には、今は懲させ給ふやと云ひしかば、日蓮云、王地に生れたれば、身は隨へられ奉るべき樣なれども、心は隨ひ奉るべからず。念佛は無間地獄、禪は天魔の所爲なる事は疑ひなし。殊に眞言宗が此國の大なる禍ひ也。末法に法華經の行者は人に怨まれて、かゝる難あるべしと佛說き給ひて候へば、偏に釋迦如來の御神の、我身に入らせ給ひてこそ候へ。されば我身ながら悅び身に餘れり。日蓮は日本の大難を拂ひ、國を持つべき日本國の柱なり。余を失ふならば、日本國の柱を倒す也。但今此國に大惡魔入り滿ちて、國土ほろびん時にこそ、日蓮が立て申す法華經の法門正義とは見え候ふべけれ。經文限りあれば力無し。其時こそ人々は思ひ知り給ふらめと云ひしかば。日本國を呪咀申す者なりとて、法華經の第五の卷を以て、日蓮が面をうちしなり。此事は梵天帝釋も御覽あり。鎌倉八幡大菩薩も見させ給ひき。如何にも今は叶ふまじき世也。國の恩を報ぜんが爲に國に留まり、三度は諫むべし。用ひずんば山林に身を隱せと云ふ本文ありと、本より存知

せり。何なる山中にも籠りて、命の程は法華經を讀誦し奉らばやと、思ふより外は他事なし。時に五十三。同じき五月十二日鎌倉を立ちて甲斐の國へ分け入る。路次のいぶせき峯に登れば、日月を戴くが如し。谷に下れば穴に入るが如し。河猛くして船渡らず。大石流れて箭をつくが如し。道は狹くして繩の如し。草木しげりて路見えず。かゝる所へ尋ね入る事、淺からざる宿習也。かゝる道なれども、釋迦佛は手をひき、帝釋は馬となり、梵王は身に立ち添ひ、日月は眼に入りかはらせ給ふ故にや、同じき十七日甲斐の國波木井の郷へ著きぬ。波木井殿に對面ありしかば、大に悅び、今生は實長が身に及ばん程は、みつぎ奉るべし、後生をば聖人助け給へと、契りし事はたゞ事とも覺えず、偏に慈父悲母の波木井殿の身に入りかはり、日蓮をば哀み給ふ歟。其後身延山へ分け入つて山中に居し、法華經を晝夜讀誦し奉り候らへば、三世の諸佛、十方の諸佛菩薩も、此砌におはすらむ。釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を說き給ふ。日蓮は身延山に居して九箇年の讀誦なり。傳教大師は比叡山に居して三十餘年の法華經の行者也。然りといへども、彼の山は濁れる山也。我此山は天竺の靈山にも勝ぐれ、日域の比叡山にも、勝ぐれたり。然れば吹く風も、ゆるぐ木草も、流るゝ水の音までも、此山には妙法の五字を唱へずと云ふ事なし。日蓮が弟子檀那等は、此山を本として參るべし。此則ち靈山の契りなり。此山に入つて九箇年也。佛滅後二千二百三十餘年也。日蓮ひとつ志あり。一七日にして返る樣に、安房の國にやりて舊里を見せばやと思ひて、時に六十一と申す。弘安五年壬午九月八日身延山を立ちて、武藏の國千束の郷、池上へ著きぬ。釋迦佛は天竺の靈山に居して八箇年法華經を說せ給ふ。御入滅は靈山より艮に當れる、東天竺俱尸那城、跋提河の純陀が家に居して入滅なりしかども、八箇年法華經を說せ給ふ山なればとて、御墓をば靈山に建てさせ給ひき。されば日蓮も是の如く、身延山より艮に當りて、武藏の國池上右衞門の大夫宗長が家にして死ぬべく候歟。縱ひいづくにて死に候ふとも、九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉り候ふ山なれば、墓をば身延山に立てさせ給へ。未來際までも、心は身延山に住むべく候。日蓮は日本六十六箇國島二つの內に、五尺に足らざる身を一つ置く處なく候ひしが。波木井殿の御育みにて、九箇年の間身延山にして、心安く法華經を讀誦し奉り候ひつる志をば、いつの世にかは思ひ忘れ候ふべき。しらずや此人は無邊行菩薩の再誕にてや御座すらむ。日蓮は日本第一の

波木井殿御書

法華經の行者也。日蓮が弟子檀那等の中に、日蓮より後に來り給ひ候はゞ、梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者、日蓮房が弟子檀那なりと名乘つて通り給べし。此法華經は、三途の河にては船となり。死出の山にては大白牛車となり。冥道にては燈となり。靈山へ參る橋也。靈山へ ましまして、艮の廊にて尋ねさせ給へ、必ず待ち奉るべく候。但し各々の信心に依るべく 候。信心だも弱くば、いかに日蓮が弟子檀那と名乘らせ給ふとも、よも御用ひは候はじ。心に二つましまして、信心だに弱く候はゞ、峯の石の谷へころび、空の雨の大地へ落つると思召せ、大阿鼻地獄疑ひあるべからず。其時日蓮を恨みさせ給ふな。返す返すも各の信心に依るべく候。大通結緣の者は、地獄に墮ちて三千塵點劫を經候ひき。久遠下種の輩は、地獄に墮ちて五百塵點劫を經たる事、大惡知識にあふて法華經を疎略に信せし故也。返ず返すも、能々信心候ふて、事故なく靈山へましまして日蓮を尋ねさせ給へ、其時委しく申す可く候。南無妙法蓮華經。

弘安五年十月七日

波木井殿其外人人

日蓮大聖人註畫讃

第一 誕生

蓮師の姓は三國氏、父は遠州の刺史、貫名重實の次子重忠なり。師は其第四の子、其先は聖武皇帝の裔なり。父は遠州より、安房州長狹郡 東條郷の片海、市河村小湊浦に竄れて漁叟と成り。母は清原氏、恒に朝曦を仰いで念誦す。日光胸に映ずと夢みて娠めり。本朝八十五代の帝、後堀河院の御宇、貞應元年、壬午二月十六日、午の尅を以て誕れ給へり。如來の滅後、二千一百七十一年に當る。面貌嚴毅にして、容儀挺特なり。如來は二月十五日に滅を示し、元祖は二月十六日に生を現ず。次で恐くは以有るか。此汀に小水あり。旱澇にも乾溢せず。是産育の浴湯なり。

第二 登山出家

八十六代四條院の御宇天福元年 癸巳五月十二日を以て、十二歳にして同國の郡の内清澄山の寺に登り、道善房に師事し藥王麿と號す。同帝の延應元年 己亥十月八

日巳の刻を以て十八歳にして薙染す。名は是性或生字は蓮長、後に自ら日蓮と改め給ふ。眞言を道善房に學び給ふこと三年なり。生知幼敏にして內には其智を善すと雖も、外には厥跡を濫らず。故に落髮の始、知慧を虛空藏の像に祈り給ふこと三七日。六十有餘の耆宿、右の手に明星の如くなる大寶珠を擎げ、吾に授くと夢む。爾より後一を聞て十を知る。或は云、當堂の後門より老僧來つて、本尊所持の寶珠を取て、爾が祈る所の智慧を與ふと、言ひ訖らずして玉を投るに、遽に胸を通して左の袂に入ると夢むと。

第三　游學

其後游學に志して、笈を千里に擔ひ、修練を欲して笈を諸藍に負ふ。先づ鎌倉に於て淨土宗を學す、本山に還り來つて寺僧等に之を敎ふ。大阿臨終に狂亂叫喚して血を歐て死す。十即十生に違ふ故に之を捨つ。又諸國を廻つて次に律宗を習ふ。三衣一鉢を帶するに、小乘戒の成佛の道なき故に之を捨つ。次に禪宗を學ぶ。文證なき故に之を捨つ。次に眞言宗を習ふ。祖師謗法の釋あり、故に之を捨つ。其後北嶺圓城にして、學窓に螢を聚め、南都高野にして文室に雪を映じ。三餘を以て群經を學び、一紀を經て諸宗を窺がふ。

第四　立宗

歳月功を積み疑を强くし、日夜力を勵まし、思を覃すと雖も、猶以て疑氷銷え難く、蒙霧未だ散せず。故に經藏に入て諸の經論を檢閲し給ふ。諸宗の元祖等、堅く自宗の邪義に執じ、深く所依の經論に背く。故に佛法中怨の誡責を恐れて、不惜身命の願を立て、法の邪正を別まへ、師の善惡を明めんと欲し。三十二歳八十九代後深草院の御宇、建長五年　癸　丑四月二十二日の夜より、一七日室內に入りて出給はず。同じき廿八日に朝日に向つて　掌を合せ、十遍ばかり始て自ら南無妙法蓮華經の七字を唱へ給ふ。午の刻淸澄寺の諸佛房の持佛堂の南面に於て、道善房、淨圓房等の大衆、幷に當地頭東條左金吾景信等を集めて、念佛無間、禪天魔等の法門具に經論の文を校合して折伏し給ふ。始は各對捍すと雖も、終に皆口を杜ぢ舌を捲て座を退きぬ。是卽ち宗旨建立の發軫、經王流布の濫觴なり。始は西より傳ふ、猶月の生ずるが如し。今は復東より返る、猶日の昇るが如し。巨瀛を湛えんが爲に微滯を墮し、高岳を爲らんと欲して一簣を覆せる者乎。景信が爲に計られ當夜に寺中を擯出せらる。『遠

雖於塔寺』の難是なり、爾時に淨顯房、義淨房、自房に隱し置き竊かに寺を出さしむ。其後西條華房の鄕に至つて靑蓮房に寓居し給ふ。西條の地頭又念佛者なる故に深く怨嫉を懷いて、外には堂供養の導師に屈するが如くして、內には實に害を加へんと欲す。尊師兼て此事を知めすと雖も、强に其請に赴き給ふ。彼の堂に到つて唱へ演べて曰、無緣の彌陀に歸して有緣の釋迦を捨る故に、殿堂を起立し彌陀を安置すと雖へども、必ず阿鼻獄に墮す可しと。之に依て堂宇建立の檀越倍瞋り、卽座に害せんと欲すと雖も、大力の人多く供奉する故に止にき。元祖堂の椽より覆を命じて房に歸り給へり。

第五　安國論

同じき年國主を諫めんが爲に、速に房州より鎌倉名越の松葉谷に移つて小庵に栖給て、諸宗の謗法を破し、三大秘法を立て、每日名越の山中に入て高聲に、妙法の首題を唱へ給ふ。爰に宗義建立より第五年に當つて、正嘉元年丁巳八月二十三日戊亥の刻に大地震し、又大旱魃す。同じき二年八月一日の大風、同じき二日の洪水及び飢饉疫癘、同じき三年に至て飢疫未だ息ず。正嘉三年己未三月廿八日に正元と改むと雖も彌煽にして災難未だ息ず。同じき二年四月十三日に文應と改むと雖も、終に飢疫、大水、大風、天變、地夭、止むことなし。八月に至て彌興て牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。先づ大地震に驚て重ねて駿州に到つて大藏に入り、諸の經論を勘へ掌を指して之を知しめし、立正安國論一卷を記し給ふ。正嘉元年に之を始め、文應元年庚申に勘へ給ひ畢んぬ。三十九歲同年七月十六日の辰の刻に、鎌倉の奉行宿谷左衞門入道四信に屬して、副元帥平の時賴に呈す。宿谷に對つて諫めて曰く、國を治め民を安んぜんと欲せば、禪宗念佛者を失ひ給へと諫むべし。若し此諫を納れずんば、此一門より事起つて他國に責めらる可しと。當時世關東に歸し、人士風を貴むの上、時賴天下兵馬の權を領する故に、此論を相摸守に見せしむ。爾より來畫は國主を諫め、夜は弟子に語る。論の旨は天下に謗法の音無んば、豐樂期せずして來り、國中に讀經の勤あらば災殃攘はずして去らむ。三たび天下を諫め給ふ是初度なり。

第六　夜討

其後數日を經て、諸宗數百人草庵に寄來り夜討を爲んと欲す。元祖多勢が中を破つて、其夜の害を遁れ給ふ。弟子能登公、並に檀那進士太郎を始めとして、疵を被る者

多し。建長五年より已來、康元の比頻りに天下を諫め給ふ、此難故に來るなり。元祖曰、去ぬる康元の念佛者等、此由を聞て、上下の諸人に語り、討殺さむと欲せりと。

第七　伊東

弘長元年辛酉五月十二日を以て、四十歳にして豆州伊東の浦に謫せらる。諸餘の弟子皆相伴ひ給はず、唯日朗一人隨從し給ふ。例せば證空法師三井の智興に師事し。智興病あり、醫治効あらず。時に安部の晴明陰陽の術を究む。其徒救を乞ふ。晴明が曰、法師の病起じ。而るに我に秘符あり。若し人を以て相貨へば其方を試むべしと。始め興の徒、興の疾を患ふる者多し。皆曰く我等若し命の代るべき者あらば亦辭じと。此事を聞くに及んで蹙縮して應せず。空法師の謂く、法の爲に命を捨るは大士の常なり、況んや師に貨て死なんこと、我何ぞ遜ざらんやと。便ち安氏に報ず。同侶歎伏せざること無し。卽ち安氏方を施すに興の疾立ろに愈え、空早く病を受て身心惱逼せしが如く、今日朗も其志亦是の如し。但官吏制止して曰く、師弟一所に配流すべからずと。之に依て日朗は由井が濱の大樓の邊に留り給ふ。既に船を泛ぶる時朗公離緒切なり。元祖之を慰喻して曰く、例せば長保の古寂照入唐す。母强もに餘波を惜む。昭の曰く月西山に入るを見て、大唐に子有りと思せ。日東岳に出るを視ては和國に母有りと思はんと云しが如く、月の入るを見ては我師伊東に在りと思へ、日の出るを見ては日朗此濱に在りと思はんと。互に愁涙千行にして終に袂を分つ。由井が濱より獨り船に乘りて、河名の津に著き給ふ。宿の主を船守彌三郎と號す。元祖船より下つて苦み給ふに、矢妻意を同じふして慇懃に奉事し、洗足、手水、飲食等に及ぶこと三十餘日。內心に法華經を信じ終に之を受持し、內々に種々の供養を伊東に送る。『及清信士女、供養於法師』と宣べ給ふ。船守の士女、元祖大法師を供養し奉るに當れり。此津より伊東に移り、伊東八郎左衞門尉朝高が預て、彼の館の近所に屋形と云ふ處にして小庵に止住せしむ。爾時當國隣國の緇素、貴賤、名を聞て猶惡み形を見ては彌怨む。夫れ上奏を經勘狀を進むること、法を知り國を思ふと雖も、賞を忘れ罰に行はる。卞和が玉璞を楚王に献つて荊山の下に刖られ、屈原が眞諫を襄王に納て、江南の濱に遷されしに似たり。陸奥守平の重時遠流すべきの由を存ずる故に、其子武州の刺史平の長時、父重時が心を知て配流する所なり。仍て伊東の流罪は重時、長時父子の所行なり。

多し。建長五年より已來、康元の比頻りに天下を誡め給ふ、此難故に來るなり。元祖曰、去ぬる康元の念佛者等、此由を聞て、上下の諸人に語り、討殺さむと欲せりと、

第七　伊東

弘長元年辛酉五月十二日を以て、四十歳にして豆州伊東の浦に謫せらる。諸餘の弟子皆相伴ひ給はず、唯日朗一人隨從し給ふ。例せば證空法師三井の智興に師事し、智興病あり、醫治効あらず。時に安部の晴明陰陽の術を究む。其徒救を乞ふ。晴明が曰、法師の病起じ、而るに我に秘符あり。若し人を以て相貨へば其方を試むべしと。始め興の徒、興の疾を患ふる者多し。皆曰く我等若し命の代るべき者あらば亦辭じと。此事を聞くに及んで蹙縮して應ぜず。空法師の謂く、法の爲に命を捨るは大士の常なり、況んや師に貨て死なんこと、我何ぞ遜ざらんやと。便ち安氏に報ず。同侶歎伏せざること無し。卽ち安氏方を施すに興の疾立ろに愈え、空早く病を受て身心惱逼せしが如く、今日朗も其志亦是の如し。但官吏制止して曰く、師弟一所に配流すべからずと。之に依て日朗は由井が濱の大樓の邊に留り給ふ。既に船を泛ぶるの時朗公離緒切なり。元祖之を慰喩して曰く、例せば長保の古寂照入唐す。母强ちに餘波を惜む。昭の曰く月西山に入るを見て、大唐に子有りと思せ。日東岳に出るを視ては和國に母有りと思はんと云しが如く、月の入るを見ては我師伊東に在りと思へ、日の出るを見ては日朗此濱に在りと思はんと。互に愁涙千行にして終に袂を分つ。由井が濱より獨り船に乘りて、河名の津に著き給ふ。宿の主を船守彌三郎と號す。元祖船より下つて苦み給ふに、矢妻意を同じふして慇懃に奉事し、洗足、手水、飲食等に及ぶこと三十餘日。內心に法華經を信じ終に之を受持し、內々に種々の供養を伊東に送る。『及清信士女、供養於法師』と宣べ給ふ。船守の士女、元祖大法師を供養し奉るに當れり。此津より伊東に移り、伊東八郎左衞門尉朝高が預て、彼の館の近所に屋形と云ふ處にして小庵に止住せしむ。爾時當國隣國の緇素、貴賤、名を聞て猶惡み形を見ては彌怨む。夫れ上奏を經揭狀を進むること、法を知り國を思ふと雖も、賞を忘れ罰に行はる。卞和が玉璞を楚王に献つて荊山の下に刖られ、屈原が眞諫を襄王に納て、江南の濱に遷されしに似たり。陸奥守平の重時遠流すべきの由を存ずる故に、其子武州の刺史平の長時、父重時が心を知て配流する所なり。仍て伊東の流罪は重時、長時父子の所行なり。

第八　立像

此年六月朝高重病に嬰る。萬方効なく諸德手を拱く。朝高綾部正淸を遣はして法救を元祖に乞ふ。元祖許し給はず。朝高曰く平復せば法華經を受持すべしと。尊師の曰く。是は一分信仰の心にして、謗法改悔の言なり。法華經に對して訴訟なり。十羅刹女も爭でか力を勠せ給はざるべきと。卽ち懇に之を祈る。但馬公日乘、淡路公日地と師弟三人なり、沈痾頓に痊ぬれば、朝高卽ち法華經を受持して、海上の網中より涌出し給へる金色の立像の釋迦佛一軀を覩す。海底の鱗の裏より出現し給へる佛體を感得し給ふこと此病惱の故なり。元祖一期身體を離し給はざる尊像なる故に、隨身佛と號く。常に海上に向て自我偈を誦して法樂し給ふ。ある時化人來つて元祖に向て侍り、七日を過て弘長三年癸亥五月二十二日に赦免狀來る。使者は但馬公日乘なりと。此僧は朝高の胤族なり。歸倉の後は彌諸宗を破し、倍大難に値ひ給ふ。風烈しければ波高く、龍大なれば雨猛きが如し。

第九　彗星

文永元年甲子七月五日大彗星出づ。正嘉の大地震、文永の大彗星は元祖閻浮第一の法華經の行者と爲て、諸宗の大謗法の根源を糺明し給ふ。然るを國主國民有智無智共に大怨敵を成す故に、諸天善神は此行者を憐んで天變を以て徵を顯はし、堅牢地神は彼の怨敵を瞋つて、地夭を以て怪みを出す。時に閻浮第一の瑞相此に起れり。天下の災難年々に增り、世間の衰弊日々に加はる。今より後蒙古數萬艘の兵船を浮べて日本國を責めば、君上より民下に至る迄、閻浮第一の大難に値ふべし。後難當に大なるべきが故に、前瑞今甚しき者なり。徵既に豫じめ顯はる、災必ず續いて來らむ。當時斯の法華經、閻浮提の內廣く流布せしむべし。此功は誰か一天に眼を合せ、四海に肩を並ぶべきや。聖人曰はく此二の天災地夭は、外典三千餘卷にも載せられず、三賢五典史記等に記す所の大長星は、或は一尺、二尺、一丈、二丈、五丈、六丈なり。地震も亦是の如し。未だ一天ならず。內典を以て之を拘ふるに、佛の御入滅已後、斯る大瑞出現せず。月支には弗沙密多羅王、五天の佛法を滅し、十六大國の寺塔を燒拂ひ、僧尼の頭を刎られし時も是る瑞なし。漢土には會昌天子寺院四千六百餘所を止め、僧尼共六萬五百人を還俗せしめし時も出現せず。我朝には欽明の代に

佛法渡つて、守屋佛法に敵し、清盛法師七大寺を燒失し、山門園城寺を燒滅ぼせし時も出現せざる大星なり。當に知るべし、是より大なること此國内に出現すべきなりと、立正安國論を勘へ造つて最明寺入道殿に奉る。彼狀に云く此瑞は他國より此國を亡す可しと云云。

第十　母の活

此年の秋四十三歳にして重て本邦に到り給ふ。父の廟に參り、母の顏を拜し給はんが爲なり。七十有餘の老母邂逅に見て喜び給ふ。然るに頓に病死せり。元祖悲哀に堪へず、發願して曰く、弘むる所の法華經日本國に流布すべくんば、母の命を活し給へと、華を折り水を掬び、道場を莊嚴して法華經を誦し、藥王品の要文を書て淨水を以て口中に含むれば、氣を吐て蘇へり給ふ。命を延べ給ふこと四年見聞嗟異す。[illegible]に死すべきの業行も能く之を轉ずとは此の謂か。同じき頃古師に謁して問答重疊せり。先匠終に承伏して念佛の行を止め、釋迦の像を安置し給ふ。此年九月二十二日に長狹の郡西條華房の鄕蓮華寺に於て、淨圓房に對して念佛無間の法門一卷を註して送り與へ給ふ。

第十一　東條

同じき年十一月十一日に景信が館の前の大道東條の松原を過ぎ給ふ、申酉の刻に景信宿意を遂んと欲して、子弟郎從數百人を引て道を遮つて之を圍む。高祖の同伴十人に足らず。矢は雨の下るが如く、刀は電光の如く、弟子鏡忍房は害せられ、乘觀房、長英房は大疵を蒙る。景信尊師の左頭を切る。頸を刎むと欲する時刀折れたり。又射疵あり又左或右手を打折る『及加刀杖者』の難是なり。檀那工藤左近丞害せらるゝに依て。一族五十餘騎馳せ來て、元祖を天津の宿所に送り、疵を療し奉つて歸倉す。景信は十羅刹女の責を受け時節を經ずして死す。例せば天竺の罽賓國の檀彌羅王、師子尊者の頭を斬り、王も尋で病で七日にして死せしが如し。

第十二　蒙古狀

八十九代龜山院の文永五年戊辰閏正月十八日に、西戎大蒙古國より日本國を襲ふべきの由牒狀來る。其狀に云く『上天眷命せる大蒙古國の皇帝、書を日本國の王に奉ず。朕惟ふに古より小國の君境土相接するは、尙務めて信を構へ睦を修む。況んや我祖宗天の明命を受け奄に區宇あり。遐方の異域威を畏れ德に懷くもの散數

を悉すべからず。朕卽位の初高麗無辜の民久しく鉾鏑に痒むを以て、卽ち兵を罷めしめて其境域を還し、其倪旄を反さしむ。高麗の君臣感載來朝す。義君臣たりと雖も覩父子の如し。計るに王の君臣亦已に之を知らむ。高麗は朕が東藩なり。日本は高麗に密邇せり。開闢より以來亦將に中國に通せんとす。朕が躬に至て一葉の便なく、以て和好を通ぜず。尙恐らくは王國之を知ること未だ審ならざるが故に、使を遣はし書を持せて朕が志を布告す。冀くば今より以往通問結好以て相親睦せん。且つ聖人は四海を以て家と爲す、相通好せずんば豈一家の理ならんや。以て兵を用ゆるに至ては夫れ孰れか好む所ならむ。王其れ之を圖れ。不宣。至元三年戊辰正月日』。此牒狀來朝に就て返牒の有無、牒使の誅不、諸道の勘文を召し、公卿の僉議を遂げ、終に返牒無くして牒使を歸さる。羅網を開て鯨鯢を放てる者乎。牒使每夜筑紫の地を見廻り、船津軍場、委く之を圖して、人の氣色を相し處の案內を見て歸りぬ。

第十三　十一　通狀

文應元年より第九年に當つて勘文符合せり。同じき年八月廿一日に宿谷入道に遣はし給ふ狀の略に云く、『經文の如くんば彼國より此國を責めん事は必定なり。日本國中に日蓮一人彼西戎を調伏すべき者なり。乘て之を知て之を勘ふること、君の爲め國の爲め神の爲め佛の爲なれば內奏を經らる可き歟』。又同じき年の十月に十一通の狀を十一箇處に遣し給ふ。所謂鎌倉殿、宿屋入道、平左衞門尉、彌源太入道、建長寺の道隆、極樂寺の良觀、大佛殿の別當、誓福寺、淨光明寺、多寶寺、長樂寺なり。鎌倉殿に遣はし給ふ狀の略に云く、『日蓮は聖人の一分に當れり。未萌を知るが故なり。彼を調伏せんことは日蓮に非ずんば協ふ可らず。諫臣國に在る時んば則ち其國正しく、爭子家に在る時んば則ち其家直し』と。彌源太に遣はし給ふ狀の略に云く、『法華經を謗ずる者は三世の諸佛の大怨敵なり。天照太神、八幡大菩薩等此國を捨て給ふ故、大蒙古國より牒狀來る歟。自今以後各生取に成て他國の奴と作るべし』と。良觀に遣はし給ふ狀の略に云く『日蓮は日本第一の法華經の行者なり。蒙古國退治の大將たり。『於一切衆生中亦爲第一』とは是なり』と。或は使者を惡口し、或は取入れず、或は返事なし。或は返事ありと雖も披露せずして、私に之を成す。其時聖人の弟子檀那の中に送り給ふ狀の略に云く、『定めて日蓮が弟子檀那流罪死罪は一定ならく耳。少しも之を驚くこと莫れ。方々の强言申すに及ばず。是併しながら而强

毒之の故なり。日蓮庶幾せしむる所に候。各〳〵用心あるべし。少しも妻子眷屬を憶ふこと莫れ。權威を恐るゝこと莫れ。今度生死の縛を切て佛果を遂げしめ給へ』と、御評定に云く頭を刎ぬべきか鎌倉を追ふべきか、弟子檀那等の所領ある者をば之を沒取し、樓に在る者をば責め殺し或は遠流すべしと、此年東の夷俘囚起つて合戰三年連續す。翌年重ねて蒙古の牒狀來る。聖人の曰く『既に海外の二夷起る此書は恰かも符契の如し。設令日蓮富樓那の辯を得目蓮の通を現はすとも、勘ふる所當らずんば誰か之を信ぜん。此書は白樂天が樂府に超え、佛の未來記にも劣らず。末代の不思議何事か之に過ぎむ』と。弘決第二に說苑を引て云く、萌兆未だ現はれざるに存亡の機を見るを名けて聖臣と爲すと。六韜に云く、謀士五人は安危を圖り未萌を慮ることを主どると。聖人の曰く未萌を知るは六正の聖臣なり。法華を弘むる者は諸佛の使者なりと。

第十四　祈雨

相陽極樂寺の忍性常に高座にして歎ひて曰く、本朝の僧俗をして戒を持たしめ、國土の酒を止めんと欲せしに、日蓮が謗法に障へられて協ひ難しと。聖人聞て曰く、如何にしてか彼が誑惑の大慢を倒し、無間の重苦を救ふ可きと。時に弟子等特に賴基諫めて曰く、彼の律師は君臣上下歸敬せること佛の如し。輙く言を發し給はんこと訒しと。然るに文永八年仲夏より孟秋に至る迄大旱す。忍性法の効を顯さんと欲して、競ふて法雩を望む。聖人の曰く祈雨の小事に因んで佛法の大義を決せん。金光明最勝王經に云く、『惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、星宿及び風雨皆時を以て行はれず』と。天下世上の王臣士庶正法を誹謗するの諸僧を愛敬し、法華を弘通するの日蓮を治罰するが故に、諸天龍神忿怒を生ずるに依て致す所の亢旱なり。良觀此文理に暗し、病の起を知らずして治すれば還て死す。災の由を辨へずして祈らば、還て增さんと、周防公と入澤の入道とを招いて曰く、汝二人は良觀の徒衆念佛の行者なり。今に日蓮が法門を用ゆることなし。此を以て勝負を知れ、七日の內に雨ふらば念佛無間の法門を止めん、二百五十の禁戒を持ち良觀の弟子と成るべし。若し雨ふらずんば八齋戒と念佛とを止めて法華經を持ち、日蓮が弟子と成り給ふべし。往古も祈雨に就て雌雄を決す。所謂護命と最澄と守敏と弘法となりと。二人往て忍性に告ぐ。悅んで諾す。百二十餘輩の高德を集めて、六月十八日より二

十四日に至る迄、祈ると雖も雨ふらざりしかば、使を遣して約束を責む。性公猶一七日祈らんと請ふ。七月四日に至る迄二七日餘、請雨經、念佛八齋戒、眞言等を誦し、壇を天に響して雨澤を請ひ、頭を地に傾けて効驗を求む。然れ共尙雨ふらざりければ、多寶寺、淨光明寺の數百人を召ひて力を盡すと雖も、終に小雨も下らず。聖人使を遣して責て曰く、和泉式部は好色の女、能因法師は破戒の者なり、今良覩の戒門に制せる所の綺語の和歌を詠みて忽ちに雨を降す。然るに性公は持戒清淨と自讃し、顯密理を究むと誇耀し、慈悲第一と風聞す。然りと雖も祈雨を以て比べ知るに信用するに足らず。容易き小雨すら尙降すを得ず。況んや後世の一大事たる往生に於ておや。今より以後日蓮を謗ずるの邪見を翻し給ふべし。後生を恐れ給はゝ予が室に臨んで雨を降すの法と、佛に成るの道を習ひ給ふべし。曾に雨ふらざるのみに非ず、炎旱彌照り要風增吹けり。速に祈を止て早く余に歸すべしと、使三度に至りしかば、師徒寒心しき。例せば西域の記に、天竺の摩揭陀國の鬼辯、婆羅門の高論劇談の雅辭、響如くに應す。人激難することあれば帷を垂れて已に對ふ。蒞學高才も其右に出づることなし。士庶翕然として之を仰ぐこと聖の如し。阿濕縛窶沙馬鳴菩薩と云ふ者あり。智萬物に周くして道三乘を播す、毎に人に謂て曰く、此婆羅門は學師に受けず、藝稽古なし。幽寂に屏居し獨り高名を擅にす。將に神鬼相依り妖魅の附く所にあらずや。馬鳴遂に其廬に卽て曰く、願くば帷を褰げよ、敢て宿志を伸んと。婆羅門帷を垂れて以て對ふ。終に面談せず。馬鳴尋で往て王に白して較論す。王駕に命じて躬から臨んで詳かに辯論を鑒む。是時に馬鳴三藏の微言を論じ、五明の大義を述ぶ。妙辯縱橫にして高論清遠なり。而して婆羅門既に辭を述べ已る。馬鳴重て曰く、吾旨を失へり宜く重て之を述ぶべしと。時に婆羅門默然として口を杜づ。馬鳴叱つて曰く、何ぞ難を釋かざる。事ふる所の鬼魅宜く速に辭を授くべしと、疾く其帷を褰げて其怪を占ふを視る。婆羅門惶遽しく止ね止ねと曰ふ、馬鳴退て言て曰く、此子今の晨聲聞失墜す、虛名久きに非ずと、斯の謂か。王の曰く、夫の成德に非ずば誰か左道を鑒ん。人を知るの哲は後に絕れ、前を光すと云ふが如し。今も亦以て爾なり。日出でぬれば星隱れ、巧を見て拙を知る者か。然るに昔は盛德知人の歎きを發し、今は死罪流刑の難を加ふ。是則ち人に賢愚あり、世に清濁ある所以なり。

第十五　行敏狀

良觀慙愧なくして憍恚あり。法然が孫弟の念阿彌、道阿彌等が邪義に與して、倍怨嫉を加ふ。同じき年の七月八日に僧行敏、書を聖人に送る。其狀の略に云く、『所立の義最も以て不審なりと云云、同じく十三日に聖人返札あり。其後行敏訴狀を書て、自書の案文並に聖人の返牒を相副へて武將に捧ぐ。其書の略に云く、日蓮偏に法華一部に執じて、諸餘の大乘を誹謗す。乃至兵杖を家内に貯へ凶徒を室中に集む。日蓮の造意の如きは、上古も更に比類なし。末代爭でか等輩あらむ。行敏悲哀に堪えず。今月八日に狀を遣す。日蓮報じて云く、私の問答事行ひ難きか、上奏を經られて是非を明らむべしと。七月二十二日に良觀副狀あり。其略に云く、此參らし候ふ僧の申さる旨候ふと。治部入道殿・讃州管入道殿其外諸國の守護地頭雜人等に相ひ語て言く、日蓮幷に弟子等は阿彌陀佛を火に入れ水に流さんと、汝等が大怨敵なり。頸を切れ所領等を搦出せよと勸進む。又智無くして訴狀にも及ばざる眞言師數十人、禪律の僧數百人、念佛者數千人等、近習の奉行女房尼公等に付て、種々の密訴を企て、樣々の讒言を致して云く、彼の日蓮は故最明寺殿極樂寺殿を無間地獄に墮たりと申し、建長寺、壽福寺、極樂寺、長樂寺、大佛殿等を燒拂へと申し、道隆上人、良觀上人等の頸を刎よと申す。法門を尋ね給ふに及ぶ可らず。只須臾に頭を刎ぬ可し。弟子等に於ては頭を刎ね、禁獄流罪せらるべしと。聖人聞て曰く、我願既に遂ぬ。頭を刎られて師子尊者の絶たる跡を紹ぎ、天台傳教の妙なる功にも超え、付法藏の二十五人に一人を加へて、二十六人と成るべきこと、喜悅身に餘れりと。之に依て聖人を奉行所に召出し此事を徵問せらる。聖人の曰く、讒言の旨一事も違はず。所詮此事は我は國を思ふて申す所なり。世を安んじ國を持たんと欲さば、彼の法師等に召合せて聞かるべし。是非を糺明せずして理不盡に科に行はれば後悔ある可し。日蓮を拗氣せられば、佛の御使を用ゐざるに成りぬべし。然らば梵天帝釋日月四天の御科あつて、遠流死罪の後百日一年三年七年の内に、自界叛逆の難とて此一門より共打始るべし。其後他國侵逼の難とて四方より責め來り、殊に西方より責む可し。其時必ず後悔あらむと。頼綱已下の者を諫め座を起つ。聖人の曰く、無戒の良觀房、諂曲の行敏房、惡見の道隆房、邪見の聖一房、嫉妬の道阿房等の惡比丘等に訴へられて、卽ち理を懷いて非に沈む。釋迦如來此の如き末法の相を鑒みて、法華經の第五に說て云く、『常在大衆中乃至

誹謗說我惡』とは良觀、行敏、聖一、道阿彌等、最明寺殿、法光寺殿に向ひ、又十宗の惡比丘等分々己々の地頭、名主、郡司、政所、代官、沙汰人等の權門に向て、日蓮及び我弟子等を惡樣に訴ふる是なり』と。

第十六　龍の口

文永八年辛未九月十二日に、平の平衛門賴綱に遣し給ふ狀の略に云く、『日蓮忝くも鷲嶺鶴林の文を開き、鵝王烏瑟の志を覺りぬ。剩へ將來を勘ふるに粗符合を得たり。先哲に及ばずと雖も、定めて後人に希なるべき者なり。法を知り國を思ふの志、尤も賞せらるべきの處に、邪法邪敎の輩、讒奏讒言の間、久しく大忠を懷ひて未だ微望を達せず。其日副元帥平の時宗の使者として、賴綱已下の數百人の武士等、名越の小庵に來つて聖人を搦め取る。聖人の曰、日者の存知是なり。此法門を弘め始しより、命は法華經に奉り、名をば十方世界諸佛の淨土に流すべし。幸なる哉、法華經の爲に臭き頭を刎ねられなば、砂に金を易へ、石に玉を貿へるなるべしとて、草庵を出でゝ南に向て立ち給ふ時、伊和瀨の大輔惡口して荒しく衣の袖を曳く。諸人又集つて身體を曳張る。本間の辨、石を擲げ打つ。是卽ち罵詈の難、瓦石の難なり。賴綱は眼を瞋して瞰み、聲を荒くして叱ふ。聖人齒を咬で高聲に誡て曰く、日蓮は日本國の棟梁たり。予を失はゞ日本國の柱を倒すなり。只今百日の內に自界叛逆難とて共打起る可し。其後他國侵逼難とて、此國の人々打殺さるゝ而已ならず、多く生取に爲らるべし。建長寺、壽福寺、極樂寺等の念佛者禪宗の寺塔を燒拂ひ、彼等が頸を由井が濱にて悉く切り失はるべし。然らざれば日本國必ず亡ぶべしと、三度國家を諫め給ふ是第二度なり。草庵には釋迦を安じ藏經を置けり。群賊亂れ入て室を毀ち像經を糞泥に踏入る。賴綱が郎從小輔と云ふもの、聖人懷中の十卷の法華經を取出し、第五の卷を以て顏を打ること三たび、是卽ち打擲の難なり。餘の九卷をば武士雜人等足に踏み身に纏ひ、椽の下疊の上二三間に散らざる處なし。聖人又大音聲を出して念佛眞言禪律の謗法、特に良觀が雨ふらざる事、讒言の樣具さに宣べ給ふに、或は笑ひ或は瞋る。日朗は師と同罪たらんことを望み給ふと雖も、之を許さず。肘を脫て宿谷の土の樓に入る。樓は都て六人なり三位公日眞と俗四人となり。俗四人は皆刀を奪取て樓に入る。其餘の檀越等は各人に預けらる。總じて弟子檀那三百餘人處々より同時に來て、勇健の志を出して各難に値ふ。然して後申の尅の終に

鎌倉を出で、日中に小路を渡すこと朝敵の如し。若宮の小路下馬の橋の邊にして馬より下り、鶴ケ岡に向て高聲に告て曰く、八幡大菩薩は實の神歟、日蓮は日本第一の法華經の行者なり。一切衆生の法華經を謗じて、無間大城に墮つべきを助ん爲に申す法門なり。急ぎ驗を顯して靈山の誓言を遂げ給ふ可しと、由井ケ濱に馬を止め、四條の三郎左衛門尉頼基が許へ、童子熊王を遣はして此由を告知らしむ。兄弟四人徒跣にて來る。聖人の曰く、今夜頸切れに罷るなり、此數年が間願つる事是なり。此娑婆世界に於て雉と成し時は鷹に慨まれ、鼠と成し時は猫に食はれ、或は妻子の爲に身を失ふことは大地微塵よりも多し。法華經の爲には一度も失ふことなし。然るに日蓮貧道の身と生れて父母の孝養心に足らず、國の恩を報ずべき力なし。今度頸を法華經に奉り、其功德を父母に廻向し、其餘を弟子檀那に省くべしと申すは是なりと。例せば賢愚經に毗楞竭梨王一偈を請んが爲に、釘を以て身に掾〻る時に、王の言く、我生死の中に於て身を殺すこと無數なり。或は三毒の爲にして白骨を計り集むるに、須彌よりも高し、流血は五湖にも踰え、哭涙は滄海よりも多し。唐く身命を捐て〻未だ曾て法の爲にせず。今は釘を掾て道を求む。後に佛に成らん時は、智慧の劒を以て汝等が結を除かんと說きしが如し。然して漸く龍の口の海邊に至る。兵士打圍んで軒誚く。時に之を見て頼基悲慟す。聖人切に諫め給ふ。是れ吾喜なり、何ぞ汝憂ふるや。然れば則ち頼基は聖人刎頸の即座に自殺すべしと申し定む。然して子の尅終に敷皮に坐して、南方に向て掌を合せ思惟して言く、時澆季に及んで善神國を去り、聖人處を辭すとも、聖賢の頂に宿し正直の頭に止り給ふ。然るに日蓮は正法の行者なり。天神地祇本朝の諸神等何ぞ靈山の約束に違ひ擁護を加へざると。當時江島の巽より大なる光物、形滿月の如くにして乾に飛び、刎頸の座上に現ずること鷹隼の飛ぶが如し。後の山の大木に移るかと見れば、即時に雲霧立ち昏闇となる。例せば金光明最勝王經に、薩埵王子飢たる虎の爲に身を捨つる時、高山に上つて身を地に投げ、竿竹を以て頸を頗ざし血を出し、漸く虎の邊に近づくに、大地震動して日に精明なきこと羅睺障の如く、諸方暗蔽にして復光暉無しと說きしが如し。此光物は月天子の所現なり。或は八幡大菩薩の所變とも云ふ。爰に重連が郎等越智三郎左衛門尉直重既に頸を刎んと欲す。其刀折れて地に落ち、手足動かず。警固の武士等魂を銷し地に蹲り、或は馳去り、或は馬より落ち、或は馬の上に踞ま

る。又殿中には大星流り大地動き、雷電光り空中に聲有り告て曰く、正法の行者を失はゝ子孫を滅ぼし國土を亡はんと。相模守大に驚て日蓮法師の戮を宥めよと使を遣はす。龍の口の使者と金洗澤の濱に於て往向へり。聖人の曰く既に頭を刎られんとす、然りと雖も諸天地神未だ日蓮を捨られず。國主を諫めしめんが爲に正法の行者を守り、地神は地天を以て怪みを出し、諸天は天變を以て徴を彰し、龍神は時に當らざる雷電を以て之を驚かすと。竊に以れば、未聞見の靈應、不思議の神驗なり。『若人欲加惡刀杖及瓦石、卽遣變化人、爲之作衛護、刀杖不加』等の妙文現證既に明かにして、後生疑か疑はん。不輕菩薩の杖木瓦石の難にも勝れ、覺德比丘の刀杖厄害の逼にも超えたり。開士の化に赴くこと、武夫が敵に臨むにも過たること遠し。仁者は必ず勇あり身を殺しても以て仁を成す所以なり。龍の口にして頭を斬るの源起は、古武藏相模の境に鎌倉海月の間に長湖あり。其廻り四十餘里是を深澤と云ふ。爰に龍王住むこと有り。其身一にして其頭五あり。神武の御宇より垂仁の御宇に至る迄十一代の間、七百歳を經て國土を惱ます。景行天皇の御宇に龍の毒彌昌る。二十六代武烈天皇の御宇に、湖水の南山の谷津村の湊に出で、人の兒を噉ふ。其後

欽明天皇十三年夏四月十二日の戊刻より二十二日に至る迄、江野の南海湖水の湊に、雲霞暗蔽して天水氛氳し。大地震動すること終日息ず。天女雲上に顯れて童子左右に侍り、其後雲收り霞退て海上に一の島を成す。江の島と曰ふ、此土天女降居し給へり。是辨才天女の應作、無熱池の龍王の第三の娘、閻羅大王の姉、婆蘇大天の妹なり。湖水の惡龍遙かに天女の美質を見て竊かに感ず。情緒に堪へず。則ち天女の所に至て志の深き由を聞て。天女最快らずして曰く、我に本誓あり、昔く群萠を孚む。汝慈憐なくして悉く生命を斷つ心姿共に同じからず、何ぞ配偶の好き逃ならんや。龍曰く我敎命に任せ今より後、物の爲に毒あらじと誓はん、哀憐を垂れて此志を遂げしめよと。天女輙ち諾し給へり。其後人を殺すこと無く還て慈悲の德を施す。龍女誓を立てゝ南に向き山と成す。龍口の山是なり。子亥方の明神と曰ふ。元正天皇の御宇養老七年春三月に、泰澄大師島に住して大乘經を誦し、又毎日船に乘りて龍口の山に詣でゝ法樂す。明神大師に對して曰く、我菩薩の法施を受け既に三熱の苦惱を除き、宿命智を得て舊德の先を知る豈惡心を生せんや。若し國に背く者あらん時は、頭を斬て我前に懸けよ、是昔日の凶執にあらず。其累賊を捨て

て四海の内平にせむと云。泰澄神勅を受けて普く人に傳ふ。夫より以來逆人出來すれば、頭を斬て山の前に懸くること是より始まれり。

第十七　依智

黎明に龍の口を出で、十三日午の剋に相州愛甲郡依智の郷、本間六郎左衛門尉重連が館に送り奉りて兵士等還る。其時各々手を叉て曰く、日來吾等が憑み奉る阿彌陀佛を毀ると承はるが故に惡み奉りき。昨夜より不思議の事共親り拜み奉り、貴く存ずる故に、年來申つる念佛を止めんと言て、數珠を捨てゝ念佛を申す可らずと誓言を立る者多かりき。九月十三夜なれば殊に雲霧收り盡きて月の色清朗なり。庭上に立て月に向つて自我偈を誦して法樂し。天に白して言さく、抑も名月天子は法華經の會座に列り、寶塔品にして佛勅を受け、囑累品にして、付屬を被り、『如世尊勅當具奉行』と誓言を立て給ふ。佛前の誓言は日蓮なくんば虛言と爲る可し。然れば今此の如き事出來せば、悅を成して急ぎ行者に代りて、奇瑞をも見せ、佛勅の虛しからず、誓言の違はざることを顯はし給ふべきに、驗なきこそ不思議なるに、還つて快く澄渡らせ給ふは如何。大集經には日月明を現せずと說き、仁王經には日月度を失ふと述べ、最勝王經には三十三天の衆成く忿怒の心を生ずと見へたり。如何に月天子月天子と責め給ひしかば、時に應じて衆星下つて庭上の梅の枝に懸り、光を放ち給ふ、一の星は卽ち童子と現じて、聖人に向て立せ給ふ。聖人問て曰く、誰人ぞ。童子答へて云く我は是れ明星なりと。且らく語話し給ふに、見る人目を驚かし、聞く者心を迷はす。當座に侍る兵士椽より飛下りて、庭中に平臥し後苑に逃隱る。之を見て卽座に歸するもの多し。例せば唐の高僧傳に、宋の元嘉二十八年に臨州の招提寺に釋慧紹と云ふ者あり、精勤苦行す。乃ち密に燒身の意ありて常に人を雇て薪を斫り、東山の石室に積むこと高さ數丈なり。中央に一の龕を開いて己が身を容るゝに足んぬ。焚身の日初夜に至つて行道す。紹自ら香を行じ香を行ずること既に竟て、燭を以て薪を燃き、中に入て坐し、藥王本事品を誦し、蓋已に洞然たるに誦聲未だ息まず、大衆咸く一星あるを見たり。其大さ斗の如し。直ちに煙中に下つて俄にして天に上る。則ち見る者咸く天宮紹を迎ふと謂ふと云へるが如し。天捨身の志を感ずること古今是れ同じ。俄に天曇り大風吹き、江島鳴つて空に響くこと太鼓を打が如し。翌朝卯の剋に鎌倉より人來つて語つて云く、昨夜戌の剋に守殿に大なる

御騒あり、相者の曰く國大に亂るべし、此御房御勘氣の故なり。急ぎ召還されずんば世間惡かるべし。然れば則ち有が云く免すべしと。有が云く彼既に百日の内に軍起るべしと白せば其を待つべし』と云。同じき日賴綱重連に送る狀に云く、『日蓮房佐渡國に遣はされ候。兩三年候はゞ御免ある可く候。若し承つて下る若殿原の中にも、死罪などに行はるゝ事候ては、御預の爲惡かるべく候の間加樣に申候恐々謹言。九月十四日、本間六郎左衛門尉殿。左衛門尉賴綱』翌月十五日に到來す。然して依智に留まり給ふこと二十餘日、其間鎌倉に火を放つこと七八度人を殺すこと絶へず。諸人讒言すらく、日蓮が弟子等の所行なりと。之に依て日蓮が弟子檀那を鎌倉に置く可らずと云ふて、大數二百六十餘人に記せらる皆遠流すべし。樓に在る弟子等をば頭を刎ぬべしと議せらる。然りと雖も此惡行は持齋念佛者の致す所なり。

第十八　樓中狀

同じき十月三日に依智より鎌倉の樓の中に在る五人の中へ狀あり。其略に云く『今月十日に佐渡國に罷るなり。各は法華經一部づゝ遊ばして候へば、我身並に父母兄弟存亡等に回向しまし〳〵候らん。今夜の寒きにつけても、彌心苦しさ申す計りなし。樓を出させ給はば、明年の春は必ず來り給へ、見みへ參らすべく候』同じき九月に別して日朗に送り給ふ狀に云く、『日蓮は明日佐渡國へ罷るなり、今夜の寒きに付ても、樓の内の有樣思やられて痛はしくこそ候へ。哀れ殿は法華經一部を色心二法共に遊ばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をも助け給ふべき御身なり。法華經を人の讀み候は、口計り言ばかりは讀ども心には讀ます、心には讀ども身には讀ます、色心二法共に遊ばされたるこそ貴く候へ。『天諸童子、以爲給使、刀杖不加、毒不能害』と說れて候へば、別の事は有るべからず。樓をば出させ給はゞ疾く〳〵來り給へ、見たてまつり見へ奉らん』。

第十九　佐渡

佐渡島を知行する武藏前司の預りたる故に、其被官等の沙汰として、同じき十日に依智を出で、彼島に赴き給ふ。其夜武州來目河に宿し給ふより已降、朝々露に泣く千般の草村を分ち、暮々風に吟ずる一樣の松原を過ぎ給ふ。白雪眼に遮りて長途迷ひ易く、青嵐膚を徹りて遠路進み難しと雖も、十二日を經て越後州寺泊の津に着き

給ふ。同じき二十二日に寺泊より日常に送り給ふ狀に云く『此より大海を渡りて佐渡國に至んと欲するに、順風定らざれば其期を知らず。道の間の事心も筆も及ことなし。但暗に推度るべし』と。彼津より船に乘り給ふ。茲に暴風俄に起つて波濤怒り皷ち、船漂覆らんと欲す。聖人独に出で、自我偈を誦し給ふに、青衣赤衣の二童子忽然として來つて艫に立ち、漕漕と三度呼ぶ。音に應じて風止み波恬にして、征帆飛が如くにして眞崎の浦に着き給ひ、本間重連に預けらる。國人集りて眉を嚬め指を差す。配處は當國新穗郷深澤深く草茂る野中に、洛陽の蓮臺野の如なる死人を捨る處あり。塚原と名く。塚の上に小堂あり。黃葉軒を埋め青苔柱に纏はり、佛も無く僧も無き小堂なり。十一月一日に此三味堂に移り給ふ。晝夜耳に盈るは松の風、晨昏目に馴るは庭の雪のみなり。食乏しければ命を支へ難く、衣非れたれば形を蔽し回し。上漏り下濕へば、簑笠を覆ひ鹿皮を敷けり。子卿が單于に囚はれて飲食を絶し、海北に徒れたるが如く。法道が徽宗に責られて火印を燒れ、江南に放たれしに似たり。樂天は漢土の才人、管相は和國の奇士、共に勅勘を被り、同じく謫居に閑なり。今も亦これ肖たり。堂には獨尊の釋迦を安んじ、手には持經の妙典を握り、晝は日光を仰いで法華止觀を眼に曝し、夜は星月に向つて妙法の題名を口に唱へ給ふ。一朝の威を恐れ萬民の嘲を顧み、親族の恩を蒙るも意ならずして毀りを成す。適室に過り希に食を献つるも、主人に勘當せられ所領を抑へられ、父母に疎まれ兄弟に捨らる、故に敢て親附ものなし。但阿佛房夫婦のみ深く見聞を愼んで夜中に膳を具ふ。聖人の曰く、念佛者日蓮が庵室に晝夜立副ふて、通ふ人を強ちに迷はさんを責しに、阿佛房櫑を負て夜中に度々御渡あり。偏へに悲母の佐渡國に生れ代りしか云。『若我滅度後能說此經者、我遣化四衆供養於法師』の文今に在り。聖人の曰はく、此人豈佛天の化現に非ずやと。上來兩國の配流は勸持品の『數々見擯出』の數々の二字に當れり。聖人の曰く、法華經の故に度々流されずんば、數々の二字を如何せん。數々見擯出の明文但日蓮一人なりと。

第二十　問　答

國中の持齋念佛者數百人、相議して殺害すべしと守護所に訟ふ。重連が云く蔑るべきの流人に非るの由鎌倉より副狀あり。過有ては重連が大事たるべし。如かず只法門を以て責んにはと云。此に因て文永九年壬申正月十六日に、當國並に隣國信

越等の僧俗蟻の如く聚れり、良賤蜂の如く飛で塚原に幅輳す。各々罵詈を先にし俱に誹謗を事とす。權實鋒を交へて法戰既に盱ぬ。聖人は辭氣雄猛にして、止觀眞言念佛禪律等の文義一々に反質し給ふこと、猶利劍を以て爪を切り、大風の草を靡すが如し。來臨の諸僧等手を束ねて分つこと無く、卽座に歸依する者多かりき。

第二十一　重連追來

各〜の退散する時重連に問て曰く、上倉何の比ぞ、報へて七月と云ふ。聖人の曰く、鎌倉に近日軍ある可し、急ぎ上つて高名せよと。重連涕て〜言はず、猶豫を懷ひて歸りぬ。然るに去年十一月に謀叛の者有しかば、今年二月十一日に京都鎌倉に大なる軍あり。日本國の固と成るべき大將多く死ること、盛華の風に散り、清絹の火に燒るゝが如し。是は聖人毎に高山に登つて天に向つて大音聲を出して曰く、法華經の文、虛しからず。梵釋等の誓違はずんば忽に吾大難に代り、國土に驗を見せ給へ。若し爾らずんば、今の日月等は、釋迦多寶十方の諸佛を誑かし奉る大妄語の日月等なり。提婆が虛誑罪、瞿伽利が大妄語も、百千萬億倍過させ給ひなんと强盛に祈り給へば、眼前に自界叛逆難起るなり。天の責疑なし。去年九月十二日に賴綱に對して强言を以て、自他の兩災起るべしと宣給ひしに、今年二月十一日に符合しぬ。情あらん者は之を信ずべし。優塡王は賓頭盧尊者を蔑如して七日の間に國位を失なひ、相模守は日蓮大聖人を流罪して、百日の內に兵亂に値へり。聖人の云く、罰を以て德を惟へ、我門人福過十號疑なしと。其後二月十八日に本間が一族相具して塚原に來り、掌を合せて言く、扶け給へ。去ぬる正月十六日の御語は、此間疑ひ奉りしに三十日に足らずして符合しぬ。蒙古國も一定來るべく候はん。念佛無間地獄も決定たるべし、永く念佛申すべからず候と。聖人の曰く汝何を言ふぞ、相模守殿用ゐ給はずんば日本國の人用ふべからず、用ゐずんば此國必ず亡ぶべし。日蓮は法華經を弘むるが故に教主釋尊の御使なり。天照太神正八幡宮は此國には第一の宗廟無雙の靈神なりと雖も、梵釋四天等に望め奉れば縱の小神なり。然りと雖も此神人を誤る者尋常の人を殺すに似ず重犯の罪に行はる。況んや教主釋尊の御使をば、天照八幡頭を低れ掌を合せ、梵釋左右に伴なひ、日月前後を照し給ふ。然れば則ち日蓮には縱ひ敬を疎かにすと雖も、尙國を亡ぼし給ふべし。況んや流罪死罪とせるをや。玆に因て起る所の自界叛逆難なり。此後蒙古此國を責めなば、汝等も此島も安穩

なる可らず。例せば殷の紂王、比干が爭を納ずして心を割き、周の武王に伐れ。呉王、子胥が諫を用ゐずして自殺せしかば、勾踐に亡されしが如し。聞く人皆曰く、此御房は神通の人なり、怖ろし怖ろし。今より已後持齋念佛者等をば供養すべからずと。二月十一日の大亂に驚いて、弟子多く免許さる。此年開目抄二卷を記し給ふ。其文に云く『日蓮と云ひし者は去年九月十二日の子丑の尅に頭を刎ねられぬ。是は魂魄佐渡の國に至りぬ』と。摩訶止觀の普明刎頭の文と同じ。

第二十二　印性房

佐渡公、伯耆公、佐州下向の時聖人の曰く、念佛者あり印性房と號し、當房舊住の弟子をば之を知て出向はず。汝二人旅行の姿にて彼處に往て法門一言宣ぶべし、伯耆公鈎鏁し佐渡公論談せよと。卽ち彼處に往く。淨土宗の談義を始めたるの刻なれば、二人立寄て談義聽聞望の由を云ふ。印性房の云く、何方よりの修行者ぞや。答へて云く、鎌倉邊より來ると。印性が云く、鎌倉に日蓮房と云へる者、念佛無間の惡義を興して、當國に流罪せらる、之を知るやと。答へて云く、我等は奥州の住人なるが、此間所時鎌倉に上る間存知せずと。印性が云く、左もあらん、彼邪義の法師は此近里に在り。彌陀超世の悲願に迷へる大罪人なり。提婆阿伽利も屑ならずと。二人の云、此の如きの惡義をば何ぞ呵責なきや。印性が云く、責て何か爲んや、惡義を興すは彼が罪たるべしと。二人の云く、御邊は佛法中怨の過を免るべからず。若し爾らば定めて阿鼻の大苦を招くべし。不便々々。印性が云く、此御坊等は日蓮房が弟子なりとて内に入る。二人の云く、此處に臨む所以は、汝權實二教に迷ふて邪見熾盛の由を聞及ぶが故に、一句の法門を示して、逆緣を結ばしめんと欲するが故なり。師の迷を以ての故に、多の人を迷はしむるは不便の次第なり。哀れ發心して聖人の御房に參り、捨邪歸正すべしと言ひ畢つて歸りぬ。此遺恨に依て、印性の弟子檀那百餘人を引具して、守護所に出で、樣々の訴訟に及ぶ。之に依て重ねて問答あり。謗法の過至極承伏せしが故に、印性が弟子檀那等、悉く座席を追立てられ訖んぬ。

第二十三　尼問

問答の後一兩日を隔て、聖人法談の時、聽衆中の尼一人進み出で問て云く、去る比法華經の三の卷に至つて、女の字無しと仰せ候かと。聖人先づ尼の顏色を見て云く、是は先日問答に詰りつる印性房を扶けんが爲に來る尼公と見へたり。例せば天竺

の摩揭陀國摩沓婆、外道王宮の論場に於て、南印度の羅那末底菩薩に對して辭するに、年衰へ、智捷對に昏きを以て、請ふ歸て思を靜にして方に來難に酬ゐんと。第六日に至つて血を歐て死す。其將に終らんとするや、妻に顧命して曰く、爾高才あり耻づる所を忘る〳〵無れと。摩沓婆死せしも匿して喪を發せず。更に鮮綺を服して論會に來至る。德慧の曰く、惜哉摩沓婆死したり。其妻來つて我と論せんと欲する耳と。王の曰く、何を以て之を知る、願くば指告を垂よと。德慧の曰く、其妻來るに面に死喪の色あり、言に哀怨の聲を含めり、故を以て之を知る、摩沓婆死せしと。王使に命じ往て觀せしむるに、果して議ふ所の如し。王乃ち謝して曰く、佛法玄妙なりと。今尼も亦爾なり。夫の宿意を果さんが爲に來れば、速かに惡心を飜して經王に歸すべしと。則ち彼無言にして退く。聽衆中に印性が閨房なりと云ふ者あり。聖人衆て之を知しめさゞれ共、時に臨んで爾宣べ給ふ。奇事にあらずや。

第二十四　前司狀

文永十年癸酉の夏より同國内石田鄕一ノ谷に移り給ふ。名主預つて百姓入道の家を宿所と爲し給ふ。弟子少々奉侍す。其比念佛者持齋諸僧僉議して鎌倉に越へて武藏の前司に訴へて曰く、日蓮法師久しく彼島に住せば、堂一宇もある可らず。僧侶一人も住むべからず。阿彌陀佛を火に入れ水に流す。晝夜高山に登て日月に向ひ、大音聲を放つて日本國を失はんと咒咀する其聲、一國に聞ふと。前司大に瞋つて此事は披露に及ぶ可らずと云ひて、守護代へ狀を遣はす。良覩此狀を弟子に持せて佐州に下す。其狀に云く、佐渡國の流人僧日蓮弟子を引率して惡行を巧むの山其聞あり。所行の企甚だ以て奇怪なり。自今已後彼僧に相從はん輩に於ては、炳誡を加へしむべし、猶以て違犯の者は交名を注進せらるべきの由候所なり。仍而執達件の如し。文永十年十二月七日、依智六郎左衛門尉殿。沙彌覲慧在判　此狀を支證と爲して、國中の下知の樣稱計るべからず。或は日蓮房の一類、佐渡より陸地に越ゆる者をば之を渡すべし。鎌倉より佐州へ渡る者をば、堅く之を禁むべしと云ひて、津毎に之を制し船毎に之を禁む、或は市町の賣買等に就て其一類堅く之を禁ず。故に希にも住房に踵るなし。武藏前司の書札に就て、文永十一年戊申正月十四日に、聖人人々に送り給ふ狀の略に云く、此狀に云く惡行を巧む等と云。外道が云く、瑠璃は大惡人等と云。佛世の大難に超過する也、恐くは天台傳敎も未だ此難には値ひ給はじ。

當に知るべし、三人に日蓮を入て四人と爲ん。法華經の行者末法に有か、喜ばしい哉況滅度後の記文に當れり。悲しい哉、國中の諸人阿鼻獄に入んこと。涅槃經の三十八迦葉菩薩品に云、爾時に多く無量の外道より、和合して共に摩訶陀國の王阿闍世の所に往て。咸く此言を作く、大王今唯一の大惡人あり、瞿曇沙門也と。此文を指す也。

第二十五　赦免

文永十一年甲戌二月八日に、相模守、赤衣の童子來つて、流人の僧日蓮御房を赦免すべしと三度呼よと夢みる。翌朝頼綱來つて曰く、昨夜青衣の童子來つて、流人の僧日蓮御房を赦免すべしと三度呼ぶと夢むと。聖人は彌天に祈り、倍信を案し給、或時頭の白き烏飛來れり。彼漢土の燕の太子丹の白頭の烏の古き本か、吾朝の僧基法師が無音河に於て、『山烏頭も白く成にけり我還るべき時や來らむ』と、詠せし例之あり。其言未だ訖らざるに、此年の二月十四日に赦免狀あり。副元帥の豪族等免許ことを甘はずと雖も、但時宗一人の嚴命を以て寛宥せるなり。其狀に云く、『日蓮法師御勘氣の事免許する所なり。文永十一年二月十四日、藤左衛門入道殿行兼清長行平光綱』是は日朗閉圄に幽閉せられ、枷鎖に繫がれ給ふと雖も、背て之を痛み給はず。師の遠黜を訪ざらんことを甚だ大に感傷して寢寢にも忘れず、暇を獄吏に請ふて云く、暫く師の謫居に往て速に吾獄處に還らんと。官吏感泣して許す。久しく獄舍に禁ぜられて、憔悴枯槁の質なりと雖も、種々の資粮を擔負ひて、彼島に赴き給ふこと四年に八度なり。第八度に至つて此免狀を帶して、峨々たる山中の嶮しきを踰へ、漫々たる海上の危きを沙つて、三月八日の夜半に、聖人の茅廬の近所に馳來つて三度高聲に告て曰く、鎌倉より筑後御免狀を申し請けて來ると。聖人は燈下に行法有りけるが、竊かに其聲を聞しめし、經を閣き泪に咽び、其感誠を嗟歎して侍僧をして松明を出さしむ。熟々思へば、摩騰竺蘭葱嶺の阻峻を蹈み、沙河の難險を涉り、經像を白馬に馱み、教法を蒼生に踰すの志にも劣らざる者か。其時念佛者等皆議して曰く、阿彌陀佛の大怨敵善導法然を罵る者なり。然るに赦免とあつて生けと還すべきことは誠に遺恨なり、直に殺害すべしと。然れ共其力及び難き故に止にき。同じき十三日に塚原を出で、網羅津に著き給ふ。十四日は彼津に留り、十五日には船に乘りて、寺泊に至らんと欲すと雖も、大風に依り、幸に二日路を過ぎて柏崎に著き、翌日府中に著き給ふ。彼に於て又越信兩國の念佛者持齋兵言師等。雲の如

く集つて言く、日蓮は信濃路を行くべしと其聞あり。生身の阿彌陀佛の御前をば通すべからずと。是の如く評定すと雖も、越府より兵士多く隨從せしが故に、無事にして、同じき月の二十六日に鎌倉に入り給ふ。是時聖人の御年五十三なり。

第二十六　重謁賴綱

同じき年四月八日に重ねて賴綱に謁す。賴綱顏を和げ儀を正くして敬ひ祝ること始に替れり。諸人座に在て念佛眞言禪律並に爾前得道の有無等の法門を問ふに、其さに經論を引て答へ給ふ。賴綱の云く、念佛無間等の法門仰せ止らるべく候かと、聖人の云く、猪の金山を摺り、衆流の海に入り、薪の火を盛にし、風求羅を增が如し。王土なるが故に、身は從ふと雖も心は隨はず。念佛は無間、禪は天魔の所爲なる事敢て疑なし。殊に眞言宗は日本國の大なる禍なり。眞言宗に蒙古國を調伏せしめらるれば百日の戰は十日に促まり、十日の軍は一日に迫べしと。例せば慈仁不殺經並に大莊嚴論の文に、昔天竺に旃陀利兄弟六人ありて、須陀洹道を得たりき。其國の俗に准じて國主大兄を召し、勅して殺戮を行はしむ。大兄が曰く、我五戒を受けて、身を守ること謹みても慎しむ、乃至蟻の子にても亦敢て殺さず、非を爲すこと能はず。寧ろ自ら身を殺すとも敢て戒を犯さじと。時に王瞋怒して市に勅して之を殺さしむ。復王に白して言く、身は是王の民心は是我心なり。恣ひ王殺さんと欲するも、心を殺すことを得ず。仰ひで王命に從つて卽ち梟首せしめんと說けるが如し。今聖人賴綱に報へ給ふ、其れ是れ意同じ。爾時に賴綱上使として問て曰く、蒙古國は何れの月日一定寄來るべき哉。答へて曰く、經文には月日を定むることなし。天の御氣色急に見へたれば今年をば過ぐ可らずと。賴綱の云く、西の御門に御房を造つて、愛染堂の別當と成し奉るべく候。彼御堂の寄進其地一千町に及べり。天下の御祈禱あるべきの由仰せ候。聖人の云く、別に御祈禱ある可らず。只念佛眞言禪律等の邪僧の御歸依を止め給ふべしと云。然して卽ち座を起ち訖んぬ。三度天下を諫め給ふ是第三度なり。聖人の云く、此三の大事は日蓮が申にはあらず。只偏へに釋迦如來の御魂、我身に入代り給ふかと、我身ながらも喜び身に餘れりと。

第二十七　身延山

三度諫めて容られずば、身を奉じて以て退く。諫むべきを見て諫めざる、之を尸位と謂ひ、退くべきを見て退かざる、之を懷寵と謂ふ。去就理に當れば事迹斷るこ

となしと、是古の文なり。今諫三度に及べども、國主肯せざれば山林に入んと欲すと、同じき年五月十二日に鎌倉を出で、酒匂に宿し給ふ。十三日に竹の下、十四日に車返、十五日に大宮、十六日に南部、十七日に甲斐國波木井郷に入り給ふ。六月十七日に初めて庵を身延山に結び給ふ。許由が箕山の中に隱れ、夷齊が首陽の下に避しが如く、商山の四皓が世を背くの栖、竹林の七賢が蹤を隱すの處に似たり。覩れば夫れ東は天子ケ嶽日を蔽し、麓には富士河北より南に向つて漲り落つ。河の東西には山岳岌嶪たり。水流の迸しること強弩を以て矢を放つよりも甚し。南には鷹取ケ嶽雲を連ね、麓には野岡漠々として百餘里に及べり。西は七面ケ嶽峨々として積雪峰に彌ち、危峰連り屬いて白嶺ケ嶽に至る。北は身延ケ嶽霄を干す、深洞に入れば古柏梢を並べて露を瀝れ、高岳を望めば喬松枝を連ね雲を拂ふ。蕭々たる雨の朝には、離の華を折て本尊に供へ、朧々たる霞の夜には山月を待て經書を照す。蟬樹上に吟じては響を讀誦の筵に副へ、鹿林下に鳴ては聲を解説の床に交ふ。幽谷に水を汲では眞性の月を擔ひ、深山に薪を拾ては孫康が雪を負ふ。夕窓に風寒ければ忍辱を衣と爲し、曉爐に煙纖ければ法喜を食と爲す。終日一乘論談の語は山中に聞へ、覺夜法華讀誦の聲は天上に響く。山林に坐して道を求と雖も、岩松に蔭して猶教を興す。是卽ち塵を出で玄を守の操ありと雖も、國を護り人を利するの志を忘れざる所以也。山棲九年齡六十一にて、晝夜に妙法華經を讀誦し給へば、靈鷲山に相同じ。朝暮に摩訶止觀を講談し給へば、台嶺に異ならず。聖人の云、佛菩薩の栖み給功德聚の砌也。多の月日を送り、讀誦し奉る所の法華經の功德は、虛空にも餘りぬべしと云云。當山に於て御詠歌あり『立渡る身の浮雲も晴ぬべし絶ぬ御法の鷲の山風』

第二十八　蒙古來

同じき年十月五日卯の刻に、對馬の國府八幡宮の假殿の中より大火燄出づ。國府の在家の人等燒け亡るかと見るに幻なり。是は何なる事ぞと澆るに、同じき日申の刻に對馬の西佐寸の浦に、異國の兵船四百五十艘に三萬餘人乘つて寄來る。六月の辰の尅に合戰す。守護代資國等蒙古を伐取ると雖も、資國が子息等悉く伐死す。同じき十四日に壹岐國へ押寄せ、守護代平内左衛門景隆等城廓を構へ防戰すと雖も、蒙古亂れ入るの間景隆自殺す。二の島の百姓等男は或は殺し或は擒へ、女をば一所に集め手を徹して舷に結び付け虜にす。一人として害せざるなし。肥前國松浦黨數百

人伐れ虜らる。此國の百姓男女等も、壹岐對馬の如し。同じき十九日の辰の刻に筑前の博多箱崎今津佐原へ寄來る。同じき二十九日の辰の剋に、東鄕入道の覺忠、子息三郎左衛門景資、大友出羽守頼泰、大友次郎左衛門重秀、難波二郎在助、菊池次郎康成、總じて九國の兵集つて戰ふ、故に死する者相枕す。去る孟夏の聖識虛しからざる者か、上宮太子、弓箭の器を盡して、蒙古國に奪はれんと記し給ふ、懸鑑恐るべし。

第二十九　龍象房付蒙古來

龍象房と云者あり。洛中に於て人を食ふの由露顯するの間、山門の衆徒末法に入つて惡鬼國中に入れり。山王の力を以て對治を加ふべしと、彼住所を燒失し、其身を罰せんと欲する所に、自然に身命を遁れて、鎌倉に下りて隱れ居たり、又人の肉を食ふ者多く出來す。諸人一同に龍象が所爲なりと云へり。大佛殿の門の西桑ケ谷に於て日夜に說法す。不審あらん人は問答すべしと、披露すと雖も、鎌倉中の上下釋尊の再び出世し給ふかと貴む故に、一問答に及ぶ人もなし。然るに建治三年六月九日聖人の御弟子三位公日眞、問答の爲に彼所に至り、先づ重々の難勢を舉げ給ふと雖も、龍象悉く閉口す。爰に書馬の侍四條頼基問答の座に侍りき。其後頼基其座に於て龍象を惡口せるの由、書馬に訴ふること有り、越後の入道大ひに嗔つて、龍象房と極樂寺の長老とをば諸人釋迦彌陀の如く仰ぐ處に、惡口の條奇怪なりと云ひて勘氣す、其後頼基法華經を信ずべからざるの由起請文を書て、歸參すべきの由狀あり。弘安元年四月五日頼基の返狀に云く、頼基所領を惜み頸を恐れて起請を書き候程ならば、君忽ちに法華經の敵に成らせ給ふべし。例せば良觀が讒訴に依て、釋迦佛の御使日蓮上人を配流し奉りしかば、聖人御勘氣の時申し給ふが如く、百日の內に自界叛逆の共打出來して、若干の武士亡にき。是れ偏へに良觀が失ひ奉るに候はずや。今に又龍象良觀が小乘の法に付せ給ひて、頼基に起請を書しめ給はゞ、君亦其罪に當らせ給ふべし。九十代後宇多院の弘安三年庚辰に蒙古襲ひ來り、筑前國志賀の島に於て合戰す。大元國の兵三百七十萬騎、大船七萬餘艘に込み乘て責め來る。九州の人民悉く逃失す。同じき四年辛巳五月に又蒙古の人高麗巳下の國々の兵を駈具して、七萬三千餘艘の大船に乘て責め來る。居住の爲とて世路の具を持ち、耕作の爲とて鋤鍬の類を貯ふ。高麗の船五百艘壹岐對馬より下つて、見合の者を打殺す。人民脫るゝに堪へずして、妻子を將ゐて深山に逃げ隱る。赤子

の泣聲を聞て押寄せ打殺す。父母我命を惜んで赤子を刺殺して隱れ居たり。然る間蒙古壹岐の島に寄せたりと博多に告げ來る。既にして中國に責來らんと欲す。之に依て九國既に落されて、早く長門國に著す。只今に都へ責め上る、又東海北海より寄來る等、街談巷語すること啾すし。萬人一同に暫時も何れの處へか逃近るべきかと、私語き合へり。仍て弘安四年五月已後は拗文彌符合する故に、偏執の輩漸く承伏す。聖人の曰く、日蓮房惡しとて南無妙法蓮華經と唱へずとも、今一度も二度も大蒙古國より押寄せ、壹岐對馬の樣に男をば打殺し女をば生取り、京鎌倉に亂れ入つて、國主並に大臣百官等を搦め取り、牛馬の前に蹴立て強く責ん時は、爭で か南無妙法蓮華經と唱へざるべき。百二代稱光院の應永三十六年己亥六月二十日に、蒙古高麗一同して軍船一千三百餘艘を海上に浮べ、其内五百餘艘は對馬の島に推し寄せ彼島を打取る。是は聖人の滅後一百三十七年に當ると雖も、聖人未來を鑒みて、蒙古起るべしと記し給ふ故に、之を出すなり。

第三十　入滅

弘安五年壬午九月八日の午の刻に、身延の澤を出で、下山に宿し、九日に大井、十日に曾禰、十一日に黑駒、十二日に河口、十三日に吳地、十四日に竹の下、十五日に關本、十六日に平塚、十七日に瀨谷、十八日に武藏國荏原郡千束鄉、池上村、右衛門太夫宗仲が屋に入り給へり。同じき二十五日に鎌倉より弟子檀那來集せり。安國論を講じ給ふ。聖人の曰く、三七日の内に我當に死すべし。其時地神悲啼して身を震ふべし。是を以て我が死相を知れ。墓所をば身延の山に立つ可しと。終焉近づく時に臨んで、朗公等の長弟に歷告て曰く、我死せば全身を瓶に納めて、身延山に送り置けと。日朗の云く、一日半日の道ならば尊命に任すべし。道既に三四日に及べり。謗法充滿の國なれば、御存日の往復の路尙容易からず。只如法に荼毗し奉つて、御遺骨を殘さず延山に納め奉らんと。聖人然りと可し給ふ。此遺告に准じて池上に葬り、御身骨を身延に納め給へり。遺付する所は注法華經一部十卷日昭。金色の立像の釋迦佛一軀安國論一卷御免狀二通（豆州佐州）日朗。自餘は之を略す。夫れ立像の釋迦佛は是佛寶。注法華經は是法寶。大聖人は是僧寶なり。是れ本地久成の三寶なり。十月八日に上足六人を定む。所謂辨阿闍梨日昭、大國阿闍梨日朗、白蓮阿闍梨日興、佐渡阿闍梨日向、伊豫阿闍梨日頂、蓮華阿闍梨日持なり。十二日の酉の刻より、未曾有の大漫荼

羅に向て北面し給ふ。十三日の辰の尅に方便品を誦し給ふ。大衆同音に之を誦す。『佛知見道故』の句に至つて頭北面西右脇にして化し給ふ。御年六十有一なり。大地震動す。日昭讀經す。衆又同誦して各々最後の供養を設く。入棺は十四日の戌の刻日昭日朗之を勤む。荼毘は子の刻、闍維の次第は、輿の前陳は日朗、後陳は日昭なり、前後各々八人相從へり。夫釋尊は靈鷲山に於て法華經を講説し、靈山の艮に當る。跋提河の邊、沙羅林にして滅に入り給へり。聖人は身延山に於て法華經を讀誦し、延山の艮に當る。田波河の邊池上の村にして寂に歸し給ふ。古今道同じ。悲ひ哉、慈日已に沒し。歎ひ哉、法燈忽ちに消へぬ。慈悲の眼永く閉ぢて微笑を止め、化道の唇默して終に哀聲を絶し給ふ。長幼の弟子は涙を地に流して河を成し、貴賤の檀越は息を空に滿して風に似たり。河水の浪の音は別離の歎を催ほし、山林の風の聲は哀戀の思を動かす。我等誕生の古を聞ては笑を含み、入滅の今を傳へては涙を垂る。此憂喜の因に托して彼の値遇の緣を結ばん。

第三十一　收骨

然して火を以て闍毗し、火滅えて已後遺骨を收め取る。如來の滅後に迦葉等の尊者舍利を耶旬が如し。遺命を蹈んで延山に送る。同じき廿一日に池上を出でゝ駿田に宿し、廿二日に湯本、廿三日に車返、廿四日に上野南條七郎の家、廿五日に身延山に入る。同き廿九日に日法眞影を刻み、四十九日に影堂に遷し、一百箇日に廟を起てゝ骨を納む。弘安六年正月久遠寺に於て年中の番帳を定め、長幼の諸弟精勤給仕す。

第三十二　目錄

弘安六年二月より、聖人の御書所持の輩は、悉く其數を盡して、一周忌に將來つて、目錄に入るべきの山之を催ほす。茲に因て僧俗各々に武州池上長榮山本門寺に雷し來る、日昭筆受す。合して百四十餘軸と爲す。如來の滅後阿難等の聖者、佛說を結集せるが如し。此外は眞書たりと雖も、衆議を調へずんば容易く錄に入る可らざるの由、六老僧等の雷同の義として、同年十月十二日に各加判あり。或記に云く、第三年の目錄は七百餘帖、第七年の目錄は千餘帖なりと。

日蓮大聖人註畫讃　終

禮讃式文

一、勤行法式

○禮佛偈

我此道場如帝珠　付十方三寶影現中　我身影現三寶前　頭面接足歸命禮

○奉請

唯願法界海　付諸佛諸賢聖　哀愍垂降臨　莊嚴此道場　唯願我等輩　身心俱淸淨
三業福智修　成就如來事　唯願衆功德　回向悉周徧　此界及十方　利益不唐捐

○敬禮

一心敬禮　付南無本師釋迦牟尼佛

一心敬禮　付南無一乘妙法蓮華經
一心敬禮　付南無宗祖日蓮大菩薩

○開經偈

無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも遇ひたてまつること難し。我今見聞し受持することを得たり、願くば如來の第一義を解せん。

至極の大乘は思議すべからず。見聞觸知皆菩提に近く。能詮は報身、所詮は法身、色相の文字は卽ち是應身なり。無量の功德皆是の經に集れり。是の故に自在に、冥に薫じ密に益す。有智無智罪を滅し善を生ず。若は信、若は謗、共に佛道を成ず。三世の諸佛甚深の妙典なり。生々世々値遇し頂戴せん。

○讀誦

妙法蓮華經方便品。如來壽量品。一部八卷二十八品乃至開結等眞讀訓讀時の宜に從ふべき也

○運想

唱へ奉る妙法は、是三世諸佛所證の境界。上行薩埵靈山別付の眞淨大法也。一たびも南無妙法蓮華經と唱へ奉れば、則ち事の一念三千正觀成就し、常寂老土現前し、無作三身の覺體顯れ。我等行者一切衆生と、同く法性の土に居して自受法樂せん。此法音を運らして法界に充滿し、三寶に供養し、普く衆生に施し、大乘一實の境界に入らしめ。佛土を嚴淨し、衆生を利益せん。

○正行

南無妙法蓮華經

○寶塔偈

此經難持　若暫持者　我卽歡喜　諸佛亦然　如是之人
諸佛所歎　是則勇猛　是則精進　是名持戒　行頭陀者

則爲疾得無上佛道　能於來世　讀持此經　是眞佛子
住淳善地　佛滅度後　能解其義　是諸天人　世間之眼
於恐畏世　能須臾說　一切天人　皆應供養

○回向

總願別願時宜に適すべし

○四誓

衆生無邊誓願度　煩惱無數誓願斷　法門無盡誓願知　佛道無上誓願成

○三歸

自ら佛に歸依せば。付當に願すべし衆生。大道を體解して、無上意を發さんと。
南無久遠實成本師釋迦牟尼佛
自ら法に歸依せば。付當に願すべし衆生。深く經藏に入て、智慧海の如くならんと。
南無平等大慧一乘妙法蓮華經

自ら僧に歸依せば。付當に願すべし衆生。大衆を統理して、一切礙り無らんと。

○奉　送

唯願諸聖衆　付決定證知我　各到隨所安　後復垂哀赴

二、施餓鬼法會儀

○禮佛偈

先づ道場に入り座具を展べ正身端嚴胡跪合掌し本佛大悲の三身は法界に周徧し衆生を慈愍し給ふと雖も特に今我道場に影現ましますと觀想し即ち唱て云

我此道場如帝珠　付十方三寶影現中　我身影現三寶前　頭面接足歸命禮

○奉　請

唯願法界海　付諸佛諸賢聖　哀愍垂降臨　莊嚴此道場　唯願我等輩　身心俱清淨
三業福智修　成就如來事　唯願衆功德　回向悉周徧　此界及十方　利益不唐捐

○敬　禮

一心敬禮　付南無本師釋迦牟尼佛
一心敬禮　付南無一乘妙法蓮華經
一心敬禮　付南無宗祖日蓮大菩薩

○供　養

願此香華雲　付徧滿十方界　供養一切佛　妙法蓮華經　菩薩聲聞衆　受用作佛事

○散　華

欲説法華經　付香華供養佛
大哉大悟大聖主　付香華供養佛
願以此功德　付香華供養佛

○行堂

是菩薩讚佛の偈なり我今亦是の如く本佛の御前に於て圓繞讚歎すと想ふべし

大哉大悟大聖主　天人象馬調御師
道風德香薫一切　付無垢無染無所著
永斷夢妄思想念　智恬怡泊慮凝靜
非因非緣非自他　意滅識亡心亦寂
非造非起非爲作　其身非有亦非無
非進非退非安危　非方非圓非短長
非青非黄非赤白　非出非沒非生滅
三昧六通道品發　慈悲十力無畏起
非紅非紫種種色　戒定慧解知見生
非是非非非得失　非彼非此非去來
非坐非臥非行住　衆生善業因緣出
非青頂肉髻　方整照曜甚明徹
旋髮紺青頂肉髻　淨眼明鏡上下眴
脣舌赤好若丹華　白齒四十猶珂雪
胸表萬字師子臆　手足柔輭具千輻
臂脩肘長指直纖　皮膚細輭毛右旋
細筋鎖骨鹿膊脹　表裏映徹淨無垢
如是等相三十二　八十種好似可見
一切有相眼對絶　無相之相有相身
能令衆生歡喜禮　投心表敬成懇懃
成就如是妙色軀　今我等八萬之衆
善滅思相心意識　象馬調御無著聖
戒定慧解知見聚　稽首歸依妙種相
梵音雷震響八種　微妙清淨甚深遠
隨順衆生心業轉　若有聞莫不意開
宛相月旋項日光　眉睞紺舒方口頰
額廣鼻脩面門開　腋掌合縵內外握
踝膝露現陰馬藏　濁水莫染不受塵
而實無相非相色　衆生身相亦然
因是自高我慢除　俱皆稽首成歸命
稽首歸依法色身　稽首歸依難思議
四諦六度十二緣　無量生死衆結斷

有レ聞或得二須陀洹一無生無滅菩薩地一演二説甚深微妙偈一出二沒水火一身自由我等咸復共稽首歸二依緣譬喩一爲二我人天龍神王一財寶妻子及國城一奉二持諸佛清淨禁一惡口罵辱終不レ瞋遍學二一切衆道法一於レ法自在爲二法王一

斯陀阿那阿羅漢或得二無量陀羅尼一遊戯深二浴法清渠一如來法輪相如レ是歸二命法輪轉以レ時世尊往昔無量劫普及二一切諸衆生一於二法内外一無所レ悋乃至失レ命不二毀傷一歷レ劫捨レ身不二惓惰一智慧深入二衆生根一我復咸共俱稽首

無漏無爲緣覺處無礙樂説大辯才或躍飛騰現二神足一清淨無邊難二思議一稽首歸二依梵音聲一勤苦修二習衆德行一能捨二一切諸難捨一頭目髓腦悉施レ人若人刀杖來加レ害晝夜攝レ心常在レ禪是故今得自在力歸二依能勤諸難勤一

○施食偈

○灑水呪

右手に檀枝を執り心存し目注ぎ神呪を默誦し淨水を飯上に灑ぎ隨誦隨灑し而して至心に觀想すべし器中の飯食色香味美徧く施して匱しからず淨名の室中一盂の香飯普く衆會に充足して乏少なる所無きが如く今も亦復是の如くなさせ給ふべしと

曩莫薩囉怛他一切蘖多嚩嚕枳帝二唵三三跋羅四三跋羅五吽六引

○對揚

南無久遠實成　付教主釋迦牟尼佛
南無證明涌現　付多寶大善逝
南無本化上行　付高祖日蓮大菩薩

擡め淨器を以て飯食を盛り淨水を盛り當に食器に面して立ち廣く悲心を運し深く三寶の冥加を請じ十方微塵刹中の一切の餓鬼をして悉皆雲集し隨意飽滿せしめんと願すべし

神呪加持淨飯食　付布施恆沙衆鬼神
歸依三寶覺菩提　究竟得成無上覺
願皆飽滿捨慳心　速脫幽冥生善道
功德無邊盡未來　一切衆生同法食

虔敬奉レ修施餓鬼法會一筵所レ願殊勲何々靈位爲ニ菩提一付追善供養
天下法界付平等利益

○諷誦　眞讃或は訓讀行堂又は立誦時の宜に隨ふべし

妙法蓮華經如來壽量品偈

自ニ我得レ佛一來　所レ經諸劫數　無量百千萬　億載阿僧祇
常説レ法教化　無數億衆生　令レ入ニ於佛道一　爾來無量劫
爲レ度ニ衆生一故　方便現ニ涅槃一　而實不ニ滅度一　常住ニ此説レ法
我常住ニ於此一　以ニ諸神通力一　令ニ顛倒衆生一　雖レ近而不レ見
衆見ニ我滅度一　廣供ニ養舍利一　咸皆懷ニ戀慕一　而生ニ渴仰心一
衆生既信伏　質直意柔輭　一心欲レ見レ佛　不ニ自惜身命一
時我及衆僧　俱出ニ靈鷲山一　我時語ニ衆生一　常在ニ此不レ滅
以ニ方便力一故　現レ有ニ滅不滅一　餘國有ニ衆生一　恭敬信樂者
我復於ニ彼中一　爲説ニ無上法一　汝等不レ聞レ此　但謂ニ我滅度一

我見ニ諸衆生一　沒ニ在於苦海一　故不ニ爲現レ身一　令ニ其生渴仰一
因ニ其心戀慕一　乃出爲説レ法　神通力如レ是　於ニ阿僧祇劫一
常在ニ靈鷲山一　及餘諸住處　衆生見ニ劫盡一　大火所レ燒時
我此土安穩　天人常充滿　園林諸堂閣　種種寶莊嚴
寶樹多ニ花果一　衆生所ニ遊樂一　諸天擊ニ天鼓一　常作ニ衆伎樂一
雨ニ曼陀羅華一　散ニ佛及大衆一　我淨土不レ毀　而衆見ニ燒盡一
憂怖諸苦惱　如レ是悉充滿　是諸罪衆生　以ニ惡業因緣一
過ニ阿僧祇劫一　不レ聞ニ三寶名一　諸有修ニ功德一　柔和質直者
則皆見ニ我身一　在ニ此而説レ法　或時爲ニ此衆一　説ニ佛壽無量一
久乃見レ佛者　爲説ニ佛難レ値　我智力如レ是　慧光照無量
壽命無數劫　久修レ業所レ得　汝等有レ智者　勿ニ於此生レ疑
當ニ斷令ニ永盡一　佛語實不レ虛　如ニ醫善方便一　爲ニ狂子一故
實在而言レ死　無ニ能説ニ虛妄一　我亦爲レ世父　救ニ諸苦患一者
爲ニ凡夫顛倒一　實在而言レ滅　以ニ常見レ我一故　而生ニ憍恣心一

放逸著五欲　墮於惡道中
隨應所可度　爲說種種法
得入無上道　速成就佛身

我常知衆生　行道不行道
毎自作是念　以何令衆生

誦し畢て更に音調を改めて唱て云

汝等鬼神衆　我今施汝供　此食遍十方　一切鬼神供
如以甘露灑　除熱得淸凉　如從飢國來　忽遇大王饍
願以此功德　普及於一切　我等與衆生　皆共成佛道

○開　經　偈

「前に出す」

○讀　誦　或は讃經要文を必讀すべし

妙法蓮華經提婆達多品　（訓讀）

○咒　讃

阿檀地一　付佛馱波羶禰引二　薩婆陀羅尼阿婆多尼引三

○鐃　鉢　鐃鉢は雙鉢を可とす◉印は銅羅を入ろゝの點なり

◉●●◉●●-●●◉●●-●●◉●-●●◉●-●●◉●●-●●◉●●-●●◉●◉◉◉

○讃　歎

爾時に寶塔の中より付大音聲を出して歎て言く、善哉善哉、釋迦牟尼世尊、能平等大慧敎菩薩法佛所護念の妙法華經を以て、大衆の爲に說き給ふ。是の如し是の如し。釋迦牟尼世尊、所說の如きは、皆是眞實なり。

○正　修

南無妙法蓮華經

○寶塔偈

〔前に出す〕

回向文

清淨の大衆、愼で三寶聖主の前に對し、施餓鬼如法の福會を開き、法界海所有の含靈に回向す。仰ぎ願ば三世十方隨機應緣の三寶、普現難思の冥衆、位々に降赴し各々に證成し給へ。今朝以來香華を供養し飯食を嚴備し、敬て異口同音に讀誦し奉る大乘妙法蓮華經唱へ奉る玄題等、鳩る所の功薫、普く眞如實際に運し、等く十方の衆生に施し、以て佛祖の冥加を乞ひ、決定不虛の利益を祈る。故に祝す大乘の法の聲は、盡虛空界の佛土に遍布し。隨緣の華の雲は、不可說刹の道場を嚴淨し。法然の燈の光は、微塵數界の內外を照し。法照の香の煙は、遍一切處の依正に薫じ。祕密の神呪は、速に六道の苦厄を救ひ。極唱の妙音は疾く三身の樂果を與へん。

妙法本有の加持力を以ての故に、灑ぐ所の俗諦常住事相本淨の水、眞諦無相一如法性の水。備ふる所の香膳、滿盆の香飯、甘糖、紅果、清茶等、悉く以て不可思議の色香味美を成ず、其用窮り無けん。味中の上々味は以て十方の諸佛に獻り、上中下味境に造て、諸の賢聖及び六道の品類に供養し、一切の鬼神及び二十五有の含靈識に布施し、諸の飢渴熱惱を除き、感に隨て果地清涼の益、及び諸の因利を與へん。唯願ば一切の三寶、哀愍加持し給へ。伏て惟れば、受持し奉る妙法蓮華經は、卽ち是眞實一切功德光、無量威德陀羅尼、祕密神呪と爲す。願ば能無垢清淨の光明を以て、普く一切の幽鬼界及び六道の諸有を照し。果報の闇、業障の闇、煩惱無明の闇を消除し。色心依正、種種淨妙の光明を得せしめん。妙法蓮華經は、卽ち是眞實施甘露水祕密神呪と爲す。願ば甘露の法雨を以て一切の含靈に灑ぎ、能煩惱の焰、業障の焰、罪報の焰を滅除し、色心依正種々淨妙の清涼を得せしめむ。

妙法蓮華經は、卽ち是眞實施乳海陀羅尼祕密神呪と爲す。願ば能色心依正種々淨妙の乳味を出し、一切餓鬼界の飢渴を除き。亦能世出世間種々の飢渴を除て、果報身、法身、智身、功德身を長養することを得せしめむ。

妙法蓮華經は、最勝修多羅秘密神呪なり。普く願ば十方法界海に於て、甘露清涼味を流出しては、以て微妙法身常波羅密の益を施し。無上醍醐味を流出しては、以て、妙有首楞嚴三昧樂波羅蜜の益を施し大王饍を流出しては以て、中道王三昧我波羅密の益を施し。一相一味解脫味を流出しては、以て畢竟空三昧淨波羅密の益を施さむ。願くば法華經中一切の三寶哀愍攝受し、一切所願の如くならしめ給へ。又此の功德を以て、我等と衆生と無始の重罪を滅し。金剛不壞の妙體を成じ。永く九法界の飢渴を除かん。南無十方三世一切諸佛世尊、菩薩摩訶薩、平等大慈一乘妙法蓮華經。

（更に施主の志す所を啓白し懇願仁別願すべきなり）

○三　歸

一切恭敬　付當願衆生　體解大道　發無上意
自歸依佛　付當願衆生　深入經藏　智慧如海
自歸依法　付當願衆生　統理大衆　一切無礙
自歸依僧

○奉　送

唯願諸聖衆　付決定證知我　各到隨所安　後復垂哀赴

三、禮法華儀式

○奉　請

唯願法界海　諸佛諸賢聖　哀愍垂降臨　莊嚴此道場　唯願我等輩　身心俱淸淨
三業福智修　成就如來事　唯願衆功德　回向悉周徧　此界及十方　利益不唐捐

○正　修

一心敬禮　妙法蓮華經大曼荼羅法寶

一心敬禮　十方法界常住三寶

○献　供

願此香華雲　徧滿十方界　供養一切佛　妙法蓮華經　菩薩聲聞衆　受用作佛事

○歸　依

稽首十方佛　圓滿最上乘　本迹開二門　法喩談眞秘　普使諸權小　悉證佛菩提

我今誓歸依　願超生死海

○敬　禮

一心敬禮　本師釋迦牟尼佛

一心敬禮　過去多寶如來

一心敬禮　十方分身釋迦牟尼佛

一心敬禮　盡法華經中及十方三世一切諸佛

一心敬禮　妙法蓮華經妙字法寶

一心敬禮　妙法蓮華經法字法寶

一心敬禮　妙法蓮華經蓮字法寶

一心敬禮　妙法蓮華經華字法寶

一心敬禮　妙法蓮華經經字法寶

一心敬禮　上行等菩薩摩訶薩

一心敬禮　盡法華經中及十方三世一切菩薩聲聞緣覺得道賢聖僧

一心敬禮　普賢菩薩摩訶薩

一心敬禮　末法唱導師宗祖日蓮大菩薩

○懺　悔　文

志心に懺悔す。我弟子一切衆生と、無始より已來身心を迷失し、生死に流轉す。六根の罪障、無量無邊、圓妙の佛乘、以て開解すること無く、一切の所願、現前することを得ず。我今妙法華經を禮敬す。此の善根を以て黑惡を發露し、過現未來三業に造る

所の無邊の重罪、皆消滅することを得ん。身心清淨にして惑障蠲除し、福智莊嚴し淨因增長し、自他の行願速に圓成することを得ん。願は諸の如來、常に在して法を說き給へ。所有功德隨喜の心を起し、菩提に回向し、常樂の果を證せん。命終の日、正念現前し。如來及び諸の聖衆に面奉し、一刹那の頃に常寂光に到らん。普く願くば衆生俱に佛道を成ぜん。

○歸命禮

南無十方法界一切三寶　付慚愧懺悔
南無法華經中一切三寶　付慚愧懺悔
南無懺悔敎主普賢大士　付慚愧懺悔

○開經偈

〔前に出す〕

○讀誦

妙法蓮華經如來壽量品。　如來神力品。　安樂行品。　普賢品等。　隨宜一品を讀誦すべし

○讚歎

記の一に曰、妙法の唱へは、唯正宗のみにあらず、二十八品俱に妙と名くるが故に、故へに品々の內、咸く體等を具し、句々の下通じて妙名を結す。

稽首妙法蓮華經　薩達磨芬陀利伽　一帙八軸四七品　六萬九千三八四
一々文々是眞佛　眞佛說法利衆生　衆生皆已成佛道　故我頂禮法華經

○運想

〔前に出す〕

○唱題

南無妙法蓮華經

○寶塔偈

〔前に出す〕

○回向

總文別文等時宜に適ふべし。

○四誓

〔前に出す〕

○三歸

〔前に出す〕

○奉送

〔前に出す〕

以上

四、放生慈濟法會

○禮佛偈

我此道場如帝珠　十方三寶影現中　我身影現三寶前　頭面接足歸命禮

○總拜

一心敬禮　妙法蓮華經大曼荼羅本尊

○勸請

唯願ば本師釋迦牟尼如來、大悲方便過現未來、能く一切衆生を救護し給ふ。今日現前の異生を哀愍し給ふが故に、道場に影現し、眞應の慈薫菩累を拔濟し、我弟子をして所願意の如くならしめ給へ。過去寶勝世尊本願力の故に、大悲哀愍道場に影現し、異物を攝取し、重苦を解脫し、勝果報を得せしめ給へ。法華經中及び十方三世一切の諸佛、大慈大悲道場に影現し、蠢爾たる生類を憐愍し救護し給へ。大乘妙法蓮華經眞乘法門、哀愍覆護し道場に顯現して、此衆生をして無明の重障を破し、根識

を淨むること得、佛慧を開發せしめ給へ。大乘經中三歸、十號、十二因緣、一切度生。無量の法門悉く道場に現じ、機緣に垂赴し、感應同交し。前衆生に於て大利益を與へ給へ。地涌の上首上行等の四大菩薩、大慈大悲道場に影現し、現前異生の四大色心を哀愍加持し給へ。大乘力の故に、忽然の間に安穩の樂を得、清涼地に到らしめ給へ。大悲觀世音菩薩、大憐愍を生じ、道場に影現し、苦惱死厄に於て能く爲に恃怙と作り、衆生の重苦決定解脫せしめ給へ。法華經中地涌千界普賢菩薩等、及び十方三世一切三乘賢聖、大慈大悲道場に影現し、福德力の故に、唯願ば我等が三業を扶助し善根を成就し、以て現前の衆生の三世の罪苦を濟拔せしめ給へ。末法の教主宗祖薩埵、大慈大悲道場に影現し。大智光明能く幽暗を照し、此衆生をして決定して無始謗法の重罪を消滅し、妙法を聞くことを得て、佛因を成就せしめ給へ。大穢迹金剛聖者、廣大の慈悲道場に影現し、淨水を加持して神呪力を驗し、密に異類に洒ぎ、大威德明其をして色心清淨にして妙法を聞き、大乘の道に入るに堪へしめ給へ。大梵天王、釋提桓因、護世四天王、一切護法の天龍鬼神、悉く皆慈悲を以て道場に影現し、擁護力の故に能く衆障を滅し、吉祥清淨にして福事成辨せしめ給へ。乃至一切平等に利益せん。

○供養

願此香華雲　付徧滿十方界　供養一切佛　妙法蓮華經　菩薩聲聞衆　受用作佛事

○敬禮

一心敬禮　本師釋迦牟尼佛
一心敬禮　寶淨多寶世尊
一心敬禮　十方法界常住佛
一心敬禮　大乘妙法蓮華經眞淨法寶
一心敬禮　十方法界常住法
一心敬禮　上行等菩薩摩訶薩
一心敬禮　觀世音菩薩摩訶薩

一心敬禮　普賢菩薩摩訶薩
一心敬禮　十方法界常住僧
一心敬禮　宗祖日蓮大菩薩

○運　想

現前の大衆、當に放生の因緣を觀ずべし。

第一には、諸佛如來慈悲廣大、衆生を度するの方便至らざる所無きことを顯さんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。諸佛如來慈悲廣大なり。衆生自業の罪惡を憎み給はず。衆生流轉の重苦を悲愍し給ふ。衆生無知の無明を思はず。偏へに衆生含識の覺性を憐み給ふ。

第二には、妙法蓮華經、苦生界成佛の利益を顯し。十界皆成の功德を顯さんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心は念ずべし。十界皆成平等大悲。龍女已に異類の覺道を開く。我等豈資料を施さゝるべけんや。十界皆成耳に聞き、口に唱ふ。意豈念せざらんや。眼豈顧みざらんや。

第三には、流水長者、殊勝の方便を傳へ。如來大悲の利益を顯し。四明尊者、放生の文を弘め、先德慈業の功德を顯し。以て放生の因緣儀則を知らしめんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。流水長者、殊勝の方便、小善根を以て大人の道を成じ。四明尊者、慈善根の力、一紙の文字を以て萬年の人を益す。

第四には、諸の梵行の者をして慈悲觀を成就し、菩提心を增長し、四攝通戒空しからざらしめんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。大乘の根本は大慈大悲なり。衆生の重罪身を苦め心を苦め、累劫にも止め難し、豈大悲を捨つべけんや。衆生の無明解脫を求めず、盲瞑にして闇の如し。寧ろ大慈を捨つべけんや。

第五には、諸の微物悉く佛性あり。拔苦與樂の因緣あり。亦能く天上に生じ淨土に生じ、佛道を成ずるの大因緣あることを明らんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。異類の衆生宿世の因緣、豈凡量を以て測らんや。宜く機緣を資くべし。大乘の功德豈小智を以て量らんや。五々の三昧光明闇を照し、般若の神呪無明を明と爲す。

第六には、菩薩の善巧方便實相の正觀を資け。十界互具十如是の法。介爾にも心あれば、卽ち三千を具する法門を明さんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。介爾にも心あれば卽ち三千を具す。異類の一念卽ち是法界なり。十界の因果三佛の依正。鳥獸魚蟲の一念を出でず。

第七には、諸の梵行の者をして、常に衆生を見ること、己が身を見るが如く異なること無く、明に唯心法界第一義諦を見せしめんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。異類の衆生我身を離れず。己心の無明同體の色質なり。彼我の苦樂唯心の風塵。彼を救へば我脫し、我を照せば彼明かなり。三世十方自にあらず他にあらず。彼我を觀ぜず實相是求む。諸法實相是心の實相也。

第八には、諸の行人、殺生は瞋恚を增し、肉食は貪欲を長じ、無慚愧は恐癡を致す。三毒罪を滅せんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。三毒心を覆て諸佛を見ず、妙法を聞かず。自他利を失ふ。肉味を貪る故に殺罪更に起し。惡業に酖著して慚愧を知らず。當に諦に味を貪る過失を觀ずべし。衆生の肉味味蘇蜜の如し。業力に依るが故に之に依て苦を生ず。諸天の甘露世間第一なり。福德に依るが故に、身光を增益す。報土の妙味思議すべからず。三味の所生之に依て生を度す。願ば諸の衆生惡味を貪らず、不味に住せず、第一味を證せん。

第九には、現前異類の必死の報命を救ひ、三因佛性を開發し、三惡四趣生々世々の苦輪を解脫せしめんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。傍生の異類苦惱を受くること多し。同類相ひ殺し血を啖ひ骨を嚙み。人あり更に殺し、皮を剝ぎ肉を食ひ。或は禽獸の爲に雄を失ひ雌を失ひ。母子共に殺るれども相ひ救ふこと能はず。食を求めては害に遇ひ。遊ばんと欲しては打擲せられ。甲を焚かれ肉を噉はれ。眼を破られ腹を割かれ。熱湯に烹られ烈火に炙られ。涙下ること雨の如くなれども宿業を如

何せん。寄ら流れて斗に滿れども、重苦誰か救はん。悲むべし生々苦輪を出でず。哀むべし世々恨を飲み瞋を益す。是の如く觀察して大悲の心を生じ、佛の功德を念じて、當に之を救護すべし。

第十には、諸の見聞の者をして慈悲平等、普く一切に及すことを知って、隨喜の心を起し、諸の惡業を行ずる者をして、慚愧の心を生じ。一切世間惡業を減少し、善根を增益せしめんと欲するが故に。

現前の大衆、當に一心に念ずべし。一人殺を禁ずれば無量の命を救ひ、一人肉を斷ずれば人天共に歎ず。一日惡を去れば一世に解脫し。一念善を生ずれば法界共に潤はん。

上來放生を修する十番の因緣を說くこと已に畢んぬ。願ば諸の行者、利益を失はざらんことを。

○呪水　當に念ずべし願ば大聖加持威神の力、能く異類に洒沾し共をして身心淸淨ならしめ妙法を聞くことに堪へしめんと乃ち楊枝を得て散反散灑すべし此間大衆慈念主題默念すべし

以冷水灑面　令得淸淨

又は

唵　咈咶嘓嚩　摩訶鉢囉　恨那嚩　吻什吻　微咭微　摩那栖　嗚深暮　嘓嚩件件

泮泮泮　婆訶

○四明尊者放生式文　法師應に放生の處に於て遠からず近からず座を敷いて坐すべし若徒衆あらば亦其傍に列位坐すべし各慈眼悲心を以て深く哀愍を起し如來大悲等く能く救拔し給ふと念ずべし是觀を作し已て燒香手爐を執て白して云

仰で本師大聖釋迦法皇、寶勝如來、宗祖大士等に白す。唯願ば慈悲證知護念し給へ。今水族或云禽獸有り。佗の爲に網し捕はれて將に死門に入らんとす。我弟子菩薩の行を修し慈愍の心を發し。放生の業を行し長壽の因を作し。其の身命を贖ふて却て放て逍遙せしむ。仍て大乘方等經典に順じて、三歸を授與し、及び十號を稱し。十二因緣皆當に爲に說くべし。但だ此類の衆生、本愚癡にして、及び諸の惡業を爲すを以て今異報を受け、六識昏迷にして大乘の深法を了知すること能はず。

仰で乞ふ、三寶靈通威德冥加し、此衆生をして心開意解し、深妙の法に於て、速に相應することを得。報を轉じて生を受け、早く解脫を得せしめ給へ。慈愍し給ふ故に。三唱

汝等衆生無始より來三寶を聞かず、歸依を解せず。所以に三有に輪廻し、今當生に

墮ちて宿債を酬償す。我今汝が爲に三寶に哀告して、求めて誠念を乞ひ、汝等が罪をして心解意解し、能く妙義を知らしめん。我當に汝等に一體三寶甚深の妙法を授くべし。謂はゆる三寶とは佛を名けて覺と曰ひ、法を不覺と名け、僧を和合と名く。此三卽ち一、此一卽ち三。不縱不横不並不別不可思議なるを秘密藏と名く。出世世間最尊最貴なる、之を名けて寶と曰ふ。今佛法僧を以て寶と爲る也。一切の萬法歸趣せざること莫し、故に三歸と名く。理廣遠なりと雖も、卽ち汝が心性なれば遠からずして復す。汝等當に深く此理を信じて、之に歸向すべし。大衆一心に衆生に三歸依の法を授與せん。唯願ば三寶、證加印成し給へ。

現前異類の一切衆生。大乘經甚深の妙義に依て、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す。歸依佛竟。歸依法竟。歸依僧竟。

今より已往佛を稱して師と爲す。更に邪魔外道に歸依せず。唯願ば三寶哀憐攝受し給へ。

佛子我今更に汝等が爲に寶勝如來の十號功德を稱し、汝等が爲に慈尊を虔請して、方便救護せん。彼の佛の本願、若衆生有て十方界に於て我名を聞ん者は、卽ち三十三天に上生することを得ん。流水長者・千魚の爲に茲の十號を稱し、彼の諸の魚類卽ち天に生ずることを得たり。長者成佛して釋迦文と號す。彼の十千の天子威德熾王を上首と爲す。夙緣の逐ふ所光明會上に於て、信相開士及び其二子の菩提の記を受くることを聞く。時に諸の天子重て十號を聞て、頓に本心を悟り、深く無生を證し、便ち茲の十號の記莂を受くることを得たり。願ば汝等今日我寶勝の十號を稱揚し奉るを聞て、彼の天子の所證の如く等くして異りあること無けん。

南無過去寶勝如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。寶勝如來常住不滅。願ば本願に乘じて我が稱名を證し。此の衆生をして速に道の記を得せしめ給へ。

諸佛子我今更に汝等が爲に十二因緣甚深の妙法を說かん。願ば三寶の力を承て、汝等をして一々に了知せしめん。此十二の法體是三德大般涅槃なり。而も汝等迷ふが故に翻じて三道と爲る。三世の因果輪轉して息まず。我今汝等が爲に先づ十二因緣の生相を唱へん。願ば汝等此の生滅の法に達して、當處卽ち是れ不生不滅なり。當處に究意し、當處に淸淨に、當處に自在なり。一究覺一切

究竟。一清淨一切清淨。一自在一切自在。諸佛に同じく大涅槃を證せん。

所謂無明は行に縁たり。行は識に縁たり。識は名色に縁たり。名色は六入に縁たり。六入は觸に縁たり。觸は受に縁たり。受は愛に縁たり。愛は取に縁たり。取は有に縁たり。有は生に縁たり。生は老死憂悲苦惱に縁たり。（此は是因縁の生相なり。再び因縁の滅相を聽け。謂ゆる無明滅すれば則ち行滅す。行滅すれば則ち識滅す。識滅すれば則ち名色滅す。名色滅すれば則ち六入滅す。六入滅すれば則ち觸滅す。觸滅すれば則ち受滅す。受滅すれば則ち愛滅す。愛滅すれば則ち取滅す。取滅すれば則ち有滅す。有滅すれば則ち生滅す。生滅すれば則ち老死憂悲苦惱滅す。

汝等水族飛禽異類の衆生。我今大乘經甚深の妙義に依て、汝等に三歸、十號、十二因縁を授くること已に畢んぬ。又復汝等無始業障深重にして、畜生に墮在することを念す。今則ち汝等が爲に、三寶の前に對して衆德を發露し、求哀懺悔せん。願ば汝等が罪業一念に消除し。便ち天に生ずることを得て佛に近いて受記せられん。（更に燒香散華念佛三寶に存して代て物類のために懺悔發露して云現前の水族飛禽異類等、志心に懺悔す。無始より已來本心を悟らずして生死に輪廻し。諸有の中に於て內慧眼無く外惡人に近き。放逸の門を開き生死の業を造り。殺盜邪婬、妄言綺語、兩舌惡罵、貪瞋邪見、自作教他、讃歎隨喜、四十種の惡、念念相應して、未だ暫も捨てず。乃至佛身の血を出し、和合僧を破り、阿羅漢を殺し、父母及び二師を殺害し、大乘經を謗し、僧祇の物を偸み、自ら淨戒を破り、佗の梵行を汚し、斗秤欺誑し、僞りを以て眞と爲し、飲酒昏迷にして諸の過失を犯し。衆生を傷害して己が飲食に充て、無量の罪を作り、無量の寃を結び、此身をして三有に輪廻せしむることを致す。今畜生に墮ちて宿債を酬償す。苦より苦に入り解脫の期無し。今比丘の大乘の法を說くに遇て、無邊の重罪佛世尊の所見所知の如く今皆懺悔す。願ば罪消除し願ば罪消滅せん。唯願ば放生已後、汝等網捕に逢はず其天年を盡し、命終の後寶勝佛の本願力を承るが故に、忉利天に生じ、天の快樂を受け。諸佛出世して大乘經を說き給はんに、彼の法會に於て再び此法を聞き、心に無生を悟り、面り佛記を承け、威德熾王の如く等くして異りあること無けん。亦冀ば放生の弟子某今日より去て菩提の行願念念增明に、苦の衆生を救はんこと常に己が想の如くせん。是の因縁を以て命終の後直に寂光に至り。三佛及び諸の聖衆を見奉ることを得。早く無生を證り、身を塵刹に分けて廣く有情を度し、同く正覺

成ぜんとこを默拜。

○誦　經

妙法蓮華經方便品　如來壽量品

○唱　題

南無妙法蓮華經

○回　向

仰ぎ願ば本師大聖慧日聖鑑、我輩隨分の慈業を證成し、平等の大悲現前異類の藏性に薫じ給へ。過去本願寶勝世尊究竟の大悲、殊に此の異生の沈淪を愍念し、一切十方の三寶憐愍證知し。我輩の修する所の善根を結定成就せしめ給へ。末法の教主高祖大士、慈悲廣大無礙方便願ば下劣の生類、生生世世の重苦を拔濟せしめ給へ。夫惟れば慧燈の上乘は無明重報の大夜を照し、經王の朗月は無始黑業の闇障を

滅し、醫王の良藥は三毒無智の重病を治し、大乘の法音は十二因緣の妄夢を覺し、總持の神咒は五欲愛染の繫縛を截ち、涅槃の寶洛は三界生死の輪廻を留む。但だ我輩慈悲薄く念力弱くして、四生の色心を感動すること能はず。智悲拙く觀察淺ふして、三有の依正を蕩滌すること能はず。未熟の導師慚愧に堪へず、不調の大衆何ぞ感慨無らん。然りと雖も妙法蓮華無上の大法勝能顯著にして利益空しからず。功用精微妙德廣大なり。況や佛陀常恆に冥加し、聖衆不斷に擁護せらるるをや。加之普門示現薩埵、甘露の法雨を灑で煩惱の焰を滅除し、遣使還告の大聖、美味の妙藥を與へて失心の病を救除す。然ば則ち無礙無障の正觀に因て、背佛謗法の餘殃速に朽ち、平等大慧の妙行に藉て、十惡五逆の重罪永く盡ん。復惟みれば是經は四大菩薩は有情の依身本有の四德久遠實成の極致を讃歎し、多寶如來は衆生身中無始の三身、全身不散の德體を證明し給ふ。若然らば現前異類の頭目身體麤細殊異と雖も、併ら全く本有常住の法體眼耳鼻舌、具缺同じからずと雖も、自ら無始法爾の妙用を保つ。故に知んぬ當頭の微物、一念三千法界の緣起を集め、一心の三諦實際の幽致を含む。是を以て我輩覺王の眞言を受持するが故に、身口意業三種の法界、三世諸佛の福德

を招き集む、當に知るべし上乘の佛事を勤作するが故に、色聲威儀一念の妙用、十方如來の法樂を現起す、故に祈る所は、現前所有異生の輩、寶勝世尊の大悲に薫じては、三因佛性の眞軌を輝かし、本師敎主の願海に浴しては、十號具足の大果を開き、光明會上の勝韻に應じてば、忉利天上の遊樂を來たし、靈山開顯の妙音に觸れては、坐寶蓮華の威儀を顯し、十方衆僧の功德を驗しては、値遇三寶の福緣を見、現前清衆の白業を逐ふては、同入薩云の利益を得ん。方に今法王の甘露密に清淨の道場に澍ぎ、雲覆ひ雨下りて、異類の心田を潤ふして、佛身の妙香自ら功德の堂宇に薫じ、氣散じ雲布て、四生の色質を染め、天神影向して乍ち佛道の勝業を喜び、華淨く風香しく、第一義天の虛空に雨り、龍鬼衛護して法門の盛事を感じ、歌妙に樂長ふして眞如實際の淨地に舞はん、乃至盡法界殘害の穢業を止め、一切群生の類、福壽の海無量ならん。

○四　誓

衆生無邊誓願度　煩惱無數誓願斷　法門無盡誓願知　佛道無上誓願成

○通　戒

願諸衆生　付諸惡莫作　諸善奉行　自淨其意　是諸佛敎　和南聖衆

○三　歸

一切恭敬　自歸依佛　付當願衆生　體解大道　發無上意
自歸依法　付當願衆生　深入經藏　智慧如海
自歸依僧　付當願衆生　統理大衆　一切無礙

禮讃式文　終

讃經要文（經前の部）

入道場觀

行者道場に入て、應に此觀を作すべし。今此道場は、四大の所成也。而して此四大、十方に周徧し三際に互徹す。四大其性融通無礙にして、一々泯淨す。故に森羅萬像、猶水中の影像、一々水に非ざること無きが如く。四大其體、皆法然本有として、一々に互具す。故に依正色心、猶帝網寶珠、一々の光影互に現ずるが如し。故此道場は、即ち是常寂光土なり。無量不可思議の刹土、其中に於て現ず。故に此一々の柱樣皆是法性、一々の墻壁、皆是法界。寸鐵尺木も沙界に通徹し。片瓦隻板も太虛に覆載す。曾無量の諸佛菩薩、諸天冥衆、此中に來集するのみにあらず。一燈の光、遍く無邊の寶刹を照し。一爐の香、普く三世の聖衆に薰ず。誦する所、詠ずる所の、一一の文字、一々の音聲、法界海盡未來際に周遍し、廣く佛事を作す。當に知るべし。此道場は、是諸佛不可思議の境界なりと。

法師歎

法師の疏に云、若開權顯實の意を聞けば、卽ち一心に於て廣く一切心を解し、及び一切の法は皆是佛法にして障礙ること無し。若分別せんと欲せば辯說窮り無く。月四月より歲に至り旋轉して盡きず。未だ眞を得ずと雖も隨喜の心能く此の如し。法を解する既に此の如く、人も亦此の如し。又云、法妙なるが故に人貴く、人貴きが故に處尊し。處尊きが故に因圓なり。因圓なるが故に果極なり。今法華法を論ずれば、一切の差別融通して一法に歸し。人を論ずれば、則ち師弟の本迹俱に皆久遠なり。二門悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鉾に當るの難事は、法華に已に說く。此法處に在れば、卽ち處貴し。夫佛の生處、得道、轉法輪、入涅槃等の處は、法王の所遊なり。皆應に塔を起つべし。此經は此法身の生處、得道の場、法輪の正體、大涅槃の窟なり。此經の在る所、須く塔を以て供養すべし。今圓の如實智を以て因

と爲し還て以て果と爲す。道前の眞如は、卽ち是正因なり。道中の眞如は、卽ち緣因と爲し、亦了因と名く。道後の眞如は、卽ち是圓果なり。故に普賢觀に云、大乘の因は、卽ち是實相なり。大乘の果は、亦是實相なり。釋論に云、初め實相を觀ずるを因と名け、觀じ竟るを果と名く。理に就て論ずれば、眞如實相は因果に當ること無く、亦前後に非ず。若衆生の修行に約すれば、則ち前後及び因果ある也。

十雙歎

記の四に云、今義に依り文に附するに、略して十雙有り。以て異相を辨ず。二乘に近記を與へ、如來の遠本を開く。隨喜は第五十の人を歎じ聞益は一生補處に至る。釋迦は五逆の闡提を指して本師と爲し、文殊は八歲の龍女を以て所化と爲す。凡そ一句を聞くにも咸く授記を與ふ、經名を守護するに功量るべからず。品を聞て受持するは永く女質を離れ、若聞て讀誦するは老ひず死なず。五種法師は現に相似を獲、四安樂行は夢に銅輪に入る。若惱亂する者は頭七分に破れ、供養することある者は福十號に過ぎたり。況や已今當は一代に絕へたる所、其敎法を歎ずるに十論を以て稱揚す。地より涌出せるをば阿逸多一人をも知らず、東方の蓮華は龍尊王未だ相本を知らず。況や迹化には三千の墨點を擧げ、本成をば五百微塵に喩へたり。本迹の事の希なる諸敎に說かず。

起信文

叙して曰、佛法は海の如し。唯信のみ能入と爲す。儒家の言尙信を最と爲す。故に曰、兵食は去つ可し、信をば去つ可からずと。況や佛法の甚深なるものをや。故に曰、信は是道の元、功德の母なりと。夫上士は解して卽ち信ず。中士は信じて而して後に解す。下士は解せずと雖も、而も信あれば則ち入る、是を深信と名く。佛法に入るに最も易し。是故に聖人信を貴しと爲す。龍樹祖師曰、佛法の大海には信を能入と爲し智を能度と爲す。若人心中に信ありて淸淨なれば、是人能く佛法に入る。若信無きは佛法に入ると能はず。剃頭染衣して種々の經を讀み、能く難じ能く答ふと雖

も、佛法の中に於て空く得る所無し。佛言く信を以て手と爲す。人手無くんば寶山の中に入るとも所得有ること無きが如く。不信の人は佛法の寶山入れども都て所得なし。得べからざるを以ての故に、則ち疑惑を生ず。若信ある者は、佛法の中に入て空く剃頭せざらん。當に知るべし、出家の人は既に寶山に入る、寧ぞ手を空ふして歸らんや。佛、梵天王の請を受けて、偈を以て答て曰ふが如き、我今甘露味の門を開く。若信あらば歡喜することを得んと。佛、此偈の中に布施の人歡喜することを得んと說き給はず。亦多聞、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の人、歡喜することを得んと說き給はず。獨り信の人を說き給ふ。佛意是の如し。法は是第一甚深微妙、無量無數、不可思議、不動、不倚、不著、無所得の法なり。一切智人に非ざれば、則ち解する能はじ。是故に佛法の中には信力を初と爲す。

決疑文

叙して曰、信心既に立て、見諦障理の惑ひ無しと雖も、猶障行の疑ひ無きこと能はず。其疑や三あり。己を疑ふ一なり。師を疑ふ二なり。法を疑ふ三なり。此に一もあれば事覆器に同じ。當に急に除斷して之を盡すべきのみ、智者大師曰、一には自を疑ふて是念を作す。我諸根闇鈍にして罪垢深重なり。其人に非るか自此の疑を作すに、道法終に發することを得ず。若道を修せんと欲せば、當に自ら輕ずること勿れ。宿世の善根測り難きを以ての故なり。二には師を疑ふ。彼の人威儀相貌是の如し。自ら尙無道なり、何ぞ能く我を敎へんと。是の疑慢を作すに卽ち障道を爲す。之を除かん法を欲せば、摩訶衍論の中に說くが如し。臭皮囊の中の金の如し。金を貪を以ての故に、其の臭囊を棄つ可らず。行者も亦爾り。師は淸淨ならずと雖も、亦應に佛の想ひを生ずべし。三には法を疑ふ。世人多く本心を執して、所受の法に於て、卽信して敬心に受行すること能はず。若心に猶豫を生ずれば、卽ち法心に染まず。是の如く覺知して、當に急に之を棄つべし。

誦經文

叙して曰、誦經の利甚だ大なり。諸經に皆云、無量の珍寶を以て布施するも、持經一偈の功に及ばずと要す。須く一心專念にして、音吐適亮に文句分明なるべし。謂ゆる法音を歌誦して、之を以て音樂と爲るものか。智者大師の曰、凡そ誦經の時は、卽ち座下に皆天龍八部四衆あつて圍繞聽法す。乃ち我能く法師と爲て、佛の正法を傳べ、四衆の爲に之を說くと觀せよ。誦經已に竟らば、此功德を以て、一切衆生未來世に於て、共に正覺を成せんと願ずべし。南岳大師の曰、散心に法華を誦し、禪三昧に入らず。坐立行、一心に法華の文字を念ず。行若し成就すれば、卽ち普賢の身を見る。荆谿尊者の曰、一句も神に染ぬれば、咸く彼岸を資く。思惟修習、永く舟航に用たり隨喜見聞、恆に主伴と爲る。若は取、若は捨、耳に經ては緣を成ず。或は順、或は逆、終に斯に因て脫す。無盡居士の曰、佛は無上の法王たり。金口の所說、聖敎の靈文、一たび之を誦すれば、則ち法輪と爲て地に轉ず。夜叉空に唱へて、四天王に報ず。天王聞き已て是の如く、輾轉して乃ち梵天に至る。幽に通じ明に通じて、龍神悅懌すること猶綸言の若し。孰か欽奉せざらん、誦經の功其旨是の如し。

指歸文

叙して曰、夫法は、如也。非如也、非非如也。如に非ず。非如に非ず。非非如に非ず。微妙深絕にして得て稱づく可らず。佛說て不可思議と爲し給ふ。凡夫二乘の徒、或は放蕩として顧みず。或は名相を執て分別す。終に皆其妙に趣くことを得ず。悲ひ夫。因も亦不思議、果も亦不思議。不思議の因を修して、不思議の果を感ず。故に普賢觀に曰、大乘の因は、諸法實相なり。大乘の果は亦諸法實相なり。是を妙法と名く。又何を以てか加へん。梁安定の曰、噫聖を去ること久遠にして、賢人出でず。唐晉の徒、含識のみ。魔邪詭惑し諸黨竝び熾に、空有云云として阬を爲し、阱を爲さしむることを致す。文句に膠して敢て動かざる者なり。滯浪に流れて住すること能はざる者あり。太だ遠ふして不至を甘心する者あり。太だ近ふして我身卽是する者あり。枯木の如くにして定と稱する者あり。竅號して慧と稱する者あり。非道を奔走して權と云ふ者あり。鬼神を假て通と言ふ者あり。放心にして廣しとする者あり。罕に言ふて密と爲る者あり。齒舌潛に傳へて口訣とする者あり。凡そ此の類自ら立て祖と

爲り、祖を繼いて家を爲す。經に反き聖に非ず。昧者は覺らず。智者大師の曰、妙は不可思議に名く。法は十界十如權實の法也。又曰、此妙法蓮華經は本地甚深の奥藏也。文に云、是法は示す可からず、世間の相常住なり。三世の如來の證得し給へる所也。文に曰、大事の因緣を以て世に出現す。四十餘年更に異の方便を以て、第一義を助顯す。今正直に方便を捨てゝ、但無上道を說く。傳敎大師の曰、謹で法華經を案ずるに云、藥王今汝に告ぐ、我所說の諸經、而も此經の中に於て、法華最も第一なり。當に知るべし、諸經の中法華を極とす。釋迦世尊宗を立つるの言なり。金口の校量深く信受すべきをや。高祖大士の曰、濁水情無けれども月を浮べて自ら淸めり。艸木言はざれども雨を得て自ら繁し。是豈覺の力ならんや。妙法蓮華經の五字は、文に非ず、義に非ず、一部の意のみ。初心の行者、其義を知らざれども、任運に其意に契ふ也。

宗門緊要

夫一言の妙法は、本地果德の祕要也。十方の諸佛は以て師とし、三世の如來は以て母とす。久遠本師妙覺果滿の境界、强て示して、不可說不可思議と爲す。尙迹佛等覺の量る所に非ず。況や復其餘をや　言語同斷信行所滅、唯信得すべし識得すべからず。玆に吾が本化の薩埵、靈山の塔中に於て親り此法を受け。後五百歲、如來の懸識に膺つて、日域に應現し。熾に別頭の敎化を振つて、專ら四衆に勸むるに信力を以てす。或は之を聞て言下に悟入し、法界圓融する者は上也。修習して入る者は次也。勝緣を結ぶ者は其次也。毒鼓の緣と爲る者は又其次也。利鈍順逆ありと雖も、其の之を攝する所以の者は一也。大なる哉本化の道也。然るに卽圓卽證の者は修習を假らず。其の未だ入らざる者は深信に妙法を唱へ、以て修し以て證すべし。其方法とは、先三千三諦圓融の妙法は、能所の相なく、心緣の相なく、因果不二事理一切也。是故に、地獄の心を起すときは、則ち法界皆獄なり。佛心を起すときは、則ち法界皆佛也。念々須く佛界に住すべし。其佛界の如きは、卽ち南無妙法蓮華經と稱するの心是也。輙ち之を念ずれば、則ち法界と融し。一たび之を唱ふれば、則ち全體三身の如來也。十方の諸佛は歡喜し、一切の天龍恭敬す。是の如く信得及し。是の如く信得徹し

て、毫も疑惑を生ぜざれ。義味を離れ情量を亡し、其心直く正しきこと、矢の如く砥の如し。前際後際を思はず、唯現今の刹那に就て南無妙法蓮華經と稱し。唱へ來り唱へ去り。念じ去り念じ來つて、一時相續すれば卽ち一時の佛。一日相續すれば、卽ち一日の佛。乃至千萬年相續すれば、卽ち千萬年の佛也。個の中若餘想雜へ起らば、則ち其想を顧みず。直に當念に於て、南無妙法蓮華經と稱し。只身心淸淨にして、凡卑に墮せざらしめんことを要せよ。如し或は三業不善を起さば、當に是の念を作すべし。佛豈之あらんやと。深く慚愧し、深く改悔し。而して行住坐臥、語默作々、心念口唱し、法界に回向して間斷無きときは、則ち法力、佛力、信力、感應道交し、功德冥に薰じ、惑障自ら消へ、豁然として大朗、融妙の三千、自在顯現し、自然に成就せんこと日あらむ。戲乎要中の要、易中の易、徹上徹下の妙門也。今末運に居して此玄旨を受く、宿に妙因を殖えたるに非ざるよりは、誠に遇ひ難き所なり。信力堅强に勤修精進して、現に巨益を得べし。豈悠々然として徒に遐劫の微緣に甘せんや、謂こと莫れ妙法を唱ふる者は、惡を作しても亦能く消すと。一念卽ち三千なれば、則ち惡は自ら惡、善は自ら善、甘露を以て毒藥とすること勿れ。高祖師の曰、佛に成らんと欲するの要は、我慢偏執の心無く、只南無妙法蓮華經と唱へよと。又云、信心淺薄の者は臨終に至らん時、阿鼻の相を現ずべし。其時我を恨むべからずと。志しあらん者、三たび斯の言を復せよ。問ふ、一向に解せざる者、但妙法を唱へむ功德も亦通せんや。曰、祖師の言へるが如く、小兒に乳を含むに、其味を知らずと雖も、自然に身を養ふ。耆婆が妙藥、誰か其方を辯べん。木瓜と稱して轉筋を療し、梅子と呼んで渴を止むるが如きに至つては、世間の淺事尙思議し難し。況や妙法の力をや。行者、其義を解せずと雖も、四德一心不思議の力、法能く人を持つ。譬ば船に乘じて彼岸に到るが如し。噫之を謗するも尙供佛に勝る。況や復信じて之を唱へんをや。只須く一心一意、唱念相續すべし。一乘の船に乘じて、更に精進の櫓棹を加へば、所止に到らんこと最も速かならん。喜ばざるべけんや、勵まざるべけんや。

讃經要文（經後の部）

立正安國論

所詮、天下泰平國土安穩は、君臣の樂ふ所、士民の思ふ所也。夫國は法に依て昌へ、法は人に因て貴し。國亡び人滅せば、佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信ずべけんや。先國家を祈りて佛法を立つべし。汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乘の一善に歸せよ、然らば則ち三界は皆佛國なり。佛國其衰へんや、十方悉く寶土なり。寶土何ぞ壞れんや、國に衰微無く、土に破壞無くんば、身は是安全にして、心は是禪定ならん、此詞此言、信ずべく崇むべし。

持法華問答鈔

過去遠々の苦みは、徒にのみ受けこせしか。などか暫く不變常住の妙因を植えざらん。未來永々の樂は、かつ〳〵心を養ふとも、強てあながちに電光朝露の名利をば貪る可らず。三界無安猶如火宅は、如來の金言。所謂諸法如幻如化は、菩薩の詞なり。寂光の都ならずば、何くも皆苦なるべし。本覺の栖を離れて、何事か樂みなるべき。願は現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ、唯今生の名聞後生の弄引なるべけれ。須く心を一にして、南無妙法蓮華經と我も唱へ、他をも勸めんのみぞ、今生人界の思出でなるべきなり。

聖愚問答鈔

謂ゆる諸佛の誠諦得道の最要は、只是妙法蓮華經の五字也。槃王の寶位を退き、龍女が蛇身を改めしも、只五字の致す所也。夫以るに、今の經は、受持の多少をば一偈一句と宣べ、修行の時尅をば、一念隨喜と定めたり。凡そ八萬法藏の廣きも、一部八卷の多きも、只是れ五字を說かんが爲なり。靈山の雲の上、鷲峰の霞の中に釋

要を結び、地涌付屬を得ることありしも、法體は何事ぞ、只此の要法に在り。天台妙樂の六千張の疏、玉を連ぬるも。道邃、行滿、數軸の釋、金を竝ぶるも、併ら此の義趣を出でず。誠に生死を恐れ、涅槃を欣ひ、信心を運び、渴仰を致さば、遷滅無常は、昨日の夢。菩提の覺悟は、今日のうつゝなるべし。只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば、滅せぬ罪やあるべき、來らぬ福やあるべき。眞實也、甚深也。是を信受すべし。

異體同心鈔

異體同心なれば萬事を成し、同體異心なれば諸事叶ふ事なしと申す事は、外典三千餘卷に定りて候、殷の紂王は七十萬騎なれども、同體異心なれば、いくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども、異體同心なれば、かちぬ。一人の心なれども、二つの心あれば、其心たがいて成ずる事なし、百人千人なれども一つ心なれば、必ず事を成す。日蓮が一類は異體同心なれば、人々すくなく候へども、大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと覺え候、惡は多けれども一善にかつ事なし。

血脈鈔

然れば久遠實成の釋尊と、皆成佛道の法華經と、我等衆生との三つ、全く差別なしと解いて、妙法蓮華經と唱へ奉る處を、生死一大事の血脈とは云ふなり。此事但日蓮が弟子檀那等の肝要なり。法華經を持つとは是なり。所詮臨終只今にありと解て信心を致して、南無妙法蓮華經と唱ふる人を、是人命終、爲千佛授手、令不恐怖、不墮惡趣と說かれて候。悅しいかな、一佛一佛に非ず、百佛二百佛に非ず、千佛まで來迎し手を取り給はん事、歎喜の感涙押へ難し。法華不信の者は、其人命終入阿鼻獄と說かれたれば、定で獄卒迎へに來て、手をや取り候はんずらん、淺猴淺猴。十王は裁斷し、俱生神は呵責せんか、今日蓮か弟子檀那等、南無妙妙蓮華經と唱へん程の者は、千佛の手を授げ給はん事、譬ば鹹夕顏の手を出す如くと思食せ。過去に法華經の結緣强盛なる故に、現在に此經を受持す、未來に佛果成就せん事疑あるべから

す、過去の生死、現在の生死、未來の生死、三世の生死に、法華經を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云ふなり、謗法不信の者は、卽斷一切世間佛種とて、佛に成べき種子を斷絶するが故に、生死一大事の血脈之無きなり。總じて日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく水魚の思を成して、異體同心にして南無妙法蓮華經と唱へ奉る處を、生死一大事の血脈とは云ふなり。

開目鈔

迹門方便品は、一念三千、二乘作佛を說て、爾前二種の失一を脫たり。然りと雖も未だ發迹顯本せざれば、實の一念三千も顯はれず、二乘作佛も定まらず。水中の月を見るが如し、根なし草の波上に浮ぶるに似たり。本門にいたりて始成正覺を破ぶれば、四敎の果をやぶる。四敎の果をやぶれば四敎の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打破て、本門の十界の因果を說き顯はす。此卽ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具、百界千如、一念三千なるべし。かうて願れば、華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等、般若、金光明、阿彌陀經、大日經等の權佛等は、此壽量の佛の天月、しばらく影を大小の器にして、浮べ給を、諸宗の學者等、近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず。水中の月に實月の想をなし、或は入て取んとおもひ、或は縄をつけて繫とゞめんとす。天台云、天月を識らず、但池月を觀ず等云。我等一分の慧解もなし、而れども一代經々の中には、此法華經計り一念三千の玉をいだけり。餘經の理は玉に似たる黃石なり、砂をしぼるに油なく、石女の子のなきが如し。諸經は智者猶佛にならず、此經は愚人も佛因を種べし。不求解脫解脫自至等と云。我竝に我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に佛界に至るべし。天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穩ならざる事をなげかざれと、我弟子に朝夕敎へしかども、疑ひを起して皆すてけん。拙者のならひは、約束せし事をまことの時は忘るゝなるべし。妻子を不便とおもふ故、現身に別れん事をなげくらん。多生曠劫に親みし妻子には、心と離れしか、佛道の爲に離れしか、何時も同じ別れなるべし。我法華經の信心をやぶらずして靈山にまゐりて返て導けかし。

詮ずる所は天もすて給へ、諸難にもあへ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責を堪へざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、惡知識に値ふゆゑなり。善に付け、惡につけ、法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立ん。日本國の位をゆづらむ、法華經をすて、觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば、用ゐじとなり。其外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ。我日本の大船とならむ等と誓いし願やぶるべからず。

觀心本尊鈔

釋尊の因行果德の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す。我等此五字を受持すれば、自然に彼因果の功德を讓り與へ給ふ。四大聲聞の領解に云、無生寶珠不求自得と云。我等が己心の聲聞界也。我が如く等くして異なることなし、我が昔の所願の如き今已に滿足しぬ、一切衆生を化して皆佛道に入しむ等云。妙覺の釋尊は、我等が血肉

因果の功德は骨髓にあらずや。寶塔品に云、其能く此經法を護ることあらむ者は、則これ我及び多寶を供養するなり。乃至亦復諸の來り給へる化佛の、諸の世界を莊嚴し光飾し給ふ者を供養するなり等云。釋迦多寶十方の諸佛は、我が佛界也。其跡を紹繼して其功德を受得す。須臾聞之卽得究竟阿耨多羅三藐三菩提とは是也。壽量品に云、然我實成佛已來、無量無邊、百千萬億那由陀劫等云。我等が己心の釋尊は、五百塵點乃至所顯の三身にして無始の古佛也。經に云、我本行菩薩道、所成壽命、今猶未盡、復倍上數等云。我等が己心の菩薩界也。地涌千界の菩薩は、己心の釋尊の眷屬なり。例せば太公周公旦等は、周武の臣下、成王幼稚の眷屬。武內の大臣は神功皇后の棟梁、仁德王子の臣下なるが如し。上行、无邊行、淨行、安立行等は、我等が己心の菩薩也。妙樂大師の云、當に知るべし、身土一念の三千なり。故に成道の時、この本理に稱ふて、一身一念法界に遍し等云。

夫始め寂滅道場華藏世界より、沙羅林に終るまで五十餘年の間、華藏、密嚴、三變、四見等の三土四土は、皆成劫の上無常の土に變化する所の、方便、實報、寂光、安養、淨瑠璃、密嚴等なり。能變の文殊師利菩薩に入りたまへば、所變の諸佛隨つて滅盡す、土

も又以て是の如し。今本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出たる常住の淨土なり、佛既に過去にも滅せず、未來にも生せず、所化以て同體なり。此れ卽ち己心の三千具足、三種の世間也。迹門十四品に未だ之を說かず。法華經の內に於いて時機未熟の故なる歟、此本門の肝心の南無妙法蓮華經の五字に於ては、佛猶文殊藥王等にも之を付屬したまはず。何に況や其已下をや。但地涌千界を召して八品を說て、之を付屬し給ふ。其本尊の爲體、本時の娑婆の上に寶塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に、釋迦牟尼佛多寶佛。釋尊の脇士、上行等の四菩薩。文殊彌勒等の四菩薩は脇屬として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、萬民の大地に處して雲閣月卿を見るが如し。十方の諸佛は大地の上に處したまふ。迹佛迹土を表するが故なり。是の如き本尊は、在世五十餘年に之なし、八年の間にも但八品に限る。正像二千年の間は、小乘の釋尊は迦葉阿難を脇士となし。權大乘並に涅槃法華經の迹門等の釋尊は、文殊普賢等を以て脇士となす、此等の佛をば正像に造り畫けども、未だ壽量品の佛ましまさず。末法に來入して、始めて此佛像出現せしむべきか。天晴ぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べきか。一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起し、妙法五字の、袋の內に此珠を裹みて、末代幼稚の頸に懸さしめたまふ。四大菩薩の此人を守護したまはむこと、太公周公の成王を攝扶し、四皓が惠帝に侍奉せしに異ならざる者なり。

諸法實相鈔

何にも今度信心をいたして、法華經の行者にて通り、日蓮が一門と成り通し給ふべし。日蓮と同意ならば、地涌の菩薩ならんか。地涌の菩薩に定まりなば、釋尊久遠の弟子たる事豈疑はんや。經に云、我久遠より來、是等の衆を敎化すとは是也。末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は、男女は嫌ふ可からず。皆地涌の菩薩の出現にあらずんば、唱へ難き題目也。日蓮一人、始は南無妙法蓮華經と唱へしが、二人、三人、百人と、次第に唱へ傳ふる也。末來も亦然るべし。是豈地涌の義にあらずや。剩へ廣宣流布の時は、日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は、大地を的とするなるべし。兎も角も法華經に、名を立て身を任せ給ふべし。

當體義鈔

正直に方便を捨て、但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱業苦の三道、法身般若解脫の三德と轉じて、三觀三諦即一心に顯はれ、其人所住の處は常寂光土なり。能居所居身土色心、俱體俱用無作三身、本門壽量の當體蓮華の佛とは、日蓮が弟子檀那等の中の事なり。是卽ち法華の當體、自在神力の顯はす所の功能なり。敢て之を疑ふべからず、之を疑ふべからず。

立正觀鈔

夫天台の觀法を尋ねれば、大蘇道場に於て、三昧開發せしより已來、目を開て妙法を思へば、隨緣眞如なり。目を閉ぢて妙法を思へば不變眞如なり。この兩種の眞如は、只一言の妙法に在り。我妙法を唱ふる時、萬法茲に達し。一代の修多羅一言に含す。所詮迹門を尋ぬれは迹廣く、本門を尋ねれば本高し。如かじ己心の妙法を觀せんにはと思食れしなり。

如說修行鈔

天下萬民、諸乘一佛乘と成て、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨壤を碎かず、代は羲農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理、顯れん時を各々御覽せよ、現世安穩の證文、疑ひ有るべからざるもの也。

一期を過ぐる事程も無ければ、いかに强敵重なるとも、努々退する心なかれ、恐る心なかれ。縱ひ頸をば鋸にて引き切り、胴をば稜鉾を以てつゝき、足には鋸を打て錐を以て捫とも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱て、唱へ死に死るならば、釋迦多寶十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來て、手をとり肩に引懸て、靈山へはしり給はゝ、二聖二天十羅刹女は、受持の者を擁護し、諸天善神は、天蓋を指し旛を上て、我等を守護して、慥かに寂光の寶

刹へ送り給ふべきなり。あらうれしや、あらうれしや。

種種御振舞御書

各々我弟子と名乗らん人々は、一人も臆し思はるべからず。親を思ひ、妻子を思ひ、所領をかへりみることなかれ。無量劫よりこのかた、親子のため所領に命すてたる事は、大地微塵よりも多し。法華經のゆへには未だ一度もすてず。法華經をば若干行せしかども、斯る事出來せしかば、退轉してやみにき。譬へば、湯を沸して水に入れ、火を切るに遂げざるが如し。各々思ひ切り給へ。此身を法華經に替るは、石に金をかへ、糞に米を替るなり。佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉阿難等、馬鳴龍樹等、南岳天台等、妙樂傳教等だにも、未だ弘め給はぬ、法華經の肝心、諸佛の眼目たる、妙法蓮華經の五字、末法の初に一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に、日蓮さきがけしたり。和讃共二陣三陣つづきて、迦葉阿難にも勝れ、天台傳教にも越へよかし。わづかの小島の主等が威嚇さんを怖ては、閻魔王の責をばいかんがすべき。佛の御使となのりながら、臆せんは無下の人々なり

祈禱鈔

大地は指ば外るゝとも、虚空を繋ぐ者はありとも、潮の滿ち乾ぬ事はありとも、日は西より出るとも、法華經の行者の祈の協はぬ事はあるべからず。法華經の行者を諸の菩薩、人天、八部等。二聖二天十羅刹女等。千に一つも來つて守り給はぬ事侍らば、上は釋迦佛をあなづり奉り、下は九界をたぼらかす失あらむ。行者は必ず不實なりとも、智慧は愚なりとも、身は不淨なりとも、戒徳は備へずとも、南無妙法蓮華經と申さば、必ず守護し給ふべし。袋汚しとて金を捨つる事なかれ。伊蘭を憎まば栴檀あるべからず。谷の池不淨なりと嫌はゝ、蓮を取るべからず。行者を嫌ひ給はゝ、誓ひを破り給ふらん。疾く疾く利生を授け給へと、強盛に申すならば、爭か祈の協はざるべき等と云云。

報恩鈔

問て云、天台傳敎の弘通し給はざる正法ありや。答て云、有り。求めて云、何物ぞや。答て云、三あり。末法の爲に佛留め置き給ふ迦葉阿難等、馬鳴龍樹等、天台傳敎等の弘通せさせ給はざる正法也。求めて云、其形貌如何。答て云、一には日本乃至一閻浮提一同に本門の敎主釋尊を本尊とすべし。所謂寶塔の内の釋迦多寶その外の諸佛、並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏、一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事を捨て、南無妙法蓮華經と唱ふべし、此事未だ弘まらず。一閻浮提の内に、佛滅後二千二百二十五年が間、一人も唱へず、日蓮一人南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經等と聲も惜まず唱ふるなり。例せば風に隨つて波の大小あり、薪によりて火の高下あり、池に隨つて蓮の大小あり。雨の大小は龍に依る。根深ければ枝しげし。源遠ければ流れ長しといふこれなり。周の世の七百年は文王の禮孝に依る。秦の世程もなし。始皇の左道也。日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は、萬年の外、未來までも流布べし。日本國の一切衆生の盲目を開ける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。此功德は傳敎天台にも超へ龍樹迦葉にも勝れたり。極樂百年の修行は、穢土一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は、末法の一時に劣るか。是は偏に日蓮が智の賢きにはあらず、時のしからしむる耳。春は花さき、秋は菓なる。夏はあたゝかに、冬はつめたし。時のしからしむるに有らずや等云云。

四信五品鈔

問ふ、汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せずして、唯題目計りを唱へしむるや。答へて曰、日本の二字に、六十六箇國の人畜財を攝盡して一つも殘さず。月氏の兩字に、豈七十箇國なからむや。妙樂の云、略して經題を擧るに、玄に一部を收む。又云、略して界如を擧るに、具さに三千を攝す。文殊師利菩薩、阿難尊者、三會八ケ年の間の佛語、之を擧げて妙法蓮華經と題し、次下に領解して云、如是我聞と云。問ふ、其義を知らざる人、唯南無妙法蓮華經と唱へて、解義の功德を具するや否や。答ふ、小兒乳

を含むに、其味を知らざれども、自然に身を益す。耆婆が妙樂、誰か辨へて之を服せん。水心なけれども、火を消し、火物を燒く、豈覺あらむや。龍樹、天台皆此意なり、重ねて示すべし。問ふ、何が故ぞ、題目に萬法を含むや。答ふ、章安の云、蓋し序王とは、經の玄意を敍す。玄意は文心を述す、文心は迹本に過ぎたるはなし。妙樂の云、法華の文心を出して、諸敎の所以を辨ずと云。濁水心なけれども、月を得て自から清めり。草木雨を得て、豈覺あつて花さくならむや。妙法蓮華經の五字は、經文にあらず、其義にあらず、唯一部の意のみ。初心の行者其心を知らざれども、而も之を行ずるに、自然に意に當るなりと云云。

三大祕法鈔

壽量品に建立する所の本尊は、五百塵點の當初より以來、此土有緣、深厚本有、無作三身の敎主釋尊是なり。壽量品に云、如來祕密神通之力等云。疏の九に云、一身卽三身なるを、名けて祕となし、三身卽一身なるを、名けて密と爲す。又昔より說かざる所を、名けて祕と爲し、唯佛のみ自ら知るを、名けて密となす。佛三世に於て等しく三身あり。諸敎の中に於て、之を祕して傳へず等云。題目とは、二の意あり。所謂正像と末法となり。正法には、天親菩薩、龍樹菩薩、題目を唱へさせ給ひしかども、自行ばかりにしてさて止みぬ。像法には、南岳、天台、亦題目ばかり、南無妙法蓮華經と唱へ給ひて、自行の爲にして廣く他の爲に說かず。是理行の題目なり。末法に入て、今日蓮が唱ふる所の題目は、前代に異なり、自行化他に亘て南無妙法蓮華經なり。名體宗用敎の五重玄の五字なり。戒壇とは、王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三大祕密の法を持ちて、有德王、覺德比丘の其乃往を、末法濁惡の末來に移さん時、敕宣並に御敎書を申し下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて、戒壇を建立すべきものか。時を待つべきのみ、事の戒法と申すは是なり。三國並に一閻浮提の人、懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王、帝釋等も來下して、踏み給ふべき戒壇なり。

日女御前御返事

爰に日蓮いかなる不思議にてや候ふらん。龍樹天親等、天台妙樂等だにも、顯はし給はざる大曼荼羅を、末法二百餘年の比、始めて法華弘通の旗じるしとして顯はし奉るなり。是全く日蓮が自作にあらず、多寶塔中の大牟尼世尊、分身の諸佛、すりかたぎたる本尊なり。されば首題の五字は中央にかゝり。四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ、普賢文殊等、舍利弗目連等坐を屈し、日天、月天、第六天王魔王、龍王阿脩羅、其外不動愛染は、南北の二方に陣を取り。惡逆の達多、愚痴の龍女、一座を張り。三千世界の人の壽命を奪ふ、惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等。しかのみならず日本國の守護神たる、天照太神、八幡大菩薩、天神七代、地神五代の神々、總じて大小の神祇等、體の神つらなる、其餘の用の神豈もるべきや。寶塔品に云、接諸大衆皆在虛空と云。此等の佛菩薩大聖等、總じて序品列坐の二界八番の雜衆等、一人ももれず此の御本尊の中に住し給ふ。妙法五字の光明に照らされて、本有の尊形と成る、是を本尊とは申す也。

乙御前御書

抑も法華經をよくよく信じたらむ男女をば、肩に擔ひ背に負ふべきよし。經文に見へて候上、鳩摩羅炎三藏と申せし人をば、木像の釋迦負はせ給ひて候ひしぞかし。日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ。昔と今と一同なり。各々は日蓮が檀那なり、爭か佛にならせ給はざるべき。氷は水より出でたれども、水よりもすさまし。青事は藍より出でたれども、重ぬれば藍よりも色まさる。同じ法華經にてはおはすれども、志を重ぬれば他人よりも色增り、利生もあるべきなり。木は火に燒かるれども栴檀の木は燒けず。火は水に消さるれども、佛の涅槃の火は消へず。華は風に散れども、淨居の華は萎まず。水は大旱魃に失れども、黃河に入りぬれば失せず。檀彌羅王と申せし惡王は、月氏の僧の頸を切りしに失なかりしかども、師子尊者の頸を切りし時、刀と手と共に一時に落ちにき。弗沙密多羅王は、鷄頭摩寺を燒きし時、十二神の棒に頭わられにき。今日本國の人々は、法華經の敵となりて、身を亡ぼし國を亡ぼしぬるなり。かう申せば日蓮が自讚也なりと、心得ぬ人は申すなり。さにはあ

らず、是を云はずば法華經の行者にはあらず。又云ふ事の後に合へばこそ、人も信ずれ。斯たゝ書き置きなばこそ、未來の人は智ありとは知り候はんずれ。又身輕法重、死身弘法と宣べて候へば、身は輕ければ人は打ちはり惡むとも、法は重ければ必ず弘まるべし。法華經弘まるならば死かばね還て重かるべし。かばね重くなるならば、此かばねは利生あるべし。利生あるならば、今の八幡大菩薩と祝るゝやうに祝べし。其時は日蓮を供養せる男女は、武内若宮なんどのやうに、崇めらるゝべしとおぼしめせ等と云云。

波木井殿御書

日蓮は日本第一の法華經の行者なり。日蓮が弟子檀那等の中に、日蓮より後に來り給ひ候はゞ、梵天、帝釋、四大天王、閻魔法王の御前にても、日本第一の法華經の行者、日蓮房が弟子檀那なりと、名乘りて通り給ふべし。此法華經は、三途の河にては船となり、死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり、靈山へ參る橋なり。靈山へまし〳〵て、艮の廊にて尋ねさせ給へ、必ず待ち奉るべく候。但し各々の信心に依るべく候。信心だも弱くば、如何に日蓮が弟子檀那と名乘らせ給ふとも、よも御用ゐは候はじ。心に二つまし〳〵て、信心だに弱く候はゝ、峯の石の谷へ轉び、空の雨の大地へ落ると思食せ、大阿鼻地獄疑ひあるべからず。其時日蓮を恨みさせ給ふな。返す返すも、各々の信心に依るべく候。

諸種回向文

普回向

仰ぎ願くば三寶俯て照鑑を垂れ給へ。無始已來、今日乃至盡未來際、或は自と爲り、或は他と爲り、作る所の善根皆悉く眞如實際に回向す。願くば一切衆生、未だ苦を離れざる者をば、願くば苦を離れしめん、未だ樂を得ざる者をば、願くば樂を得せしめん、未だ菩提心を發さざる者をば、願くば菩提心を發さしめん。未だ善を修し惡を斷ぜざる者をば、願くば善を修し惡を斷ぜしめん。未だ成佛せざる者をば、願くば早く成佛せしめん。亦願くば臨終正念にして、直に靈山淨土に到り、釋迦牟尼如來に面奉し、妙法を聽受し、速に菩提を證し、廣く衆生を利せん。假ひ惡業有て惡道に墮すべきも、願くば三寶護念の妙法力を以ての故に、定業も亦能く轉じて、永く三惡八難の報を離れ、永く下賤惡人の身を受けず。常に佛法の中に於て淸淨に出家し、常に大善知識に遇ふて、大乘の敎を聽き、大乘の義を思ひ、大乘の行を修し、法華三昧を證得し、十方法界に妙法を弘通し、廣く佛事を作さん。願くば四恩三有法界の衆生、若は親、若は怨、有緣無緣平等に薰被し、倶に薩婆若海に入て、同く平等大慧に歸せん。願くば此功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆倶に佛道を成せん。南無妙法蓮華經。

說法回向

謹み敬て法音を加誦し、一心に請し奉る。南無平等大慧一乘妙法蓮華經。南無久遠實成本師釋迦牟尼佛。南無末法唱導師宗祖日蓮大菩薩等、大慈大悲道場影現、法味を納受し哀愍加持し給へ。

當に今講讚し奉る、經釋の文義。恭く佛祖三寶の大悲願海に報じ奉る。伏て願くは本師釋迦法王、三身常住三世益物威神の力。圓解佛乘天台智者、旃陀羅尼無礙辯才威神の力。末法の敎主高祖大士、大悲大慈時機相應顯密兩益威神の力。遙に加被を蒙じ、密に威靈を借し給へ。經に曰、是經を受持せむ者、大衆の中に於て演說する所

あらんに、深妙の聲を出し能く其心に入れて皆歡喜快樂せしめん。又一、是人歡喜して法を說かんに、須臾も之を聞かば卽ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得んと。經文若空からずんば、願くば我をして深妙の法音を出し、四辯八音の分あらしめん。願ば參詣聽法の四衆をして、無始謗法の重障を滅除し、信心を增益し決定領納して大歡喜を生じ、四悉檀の利益を得、一生入妙覺の大果報を成就することを得せしめん。若會中に於て信せず解せざる者あらば、法門毛孔より入つて遠く菩提の緣と爲る。願ば我盡未來際在在處處に於て、之を開化して、是法の中に住することを得せしめん。能化所化俱に歷劫無し。妙法經　力卽身成佛。乃至法界平等利益。願以此功德普及於一切、我等與衆生皆俱成佛道と云云。南無妙法蓮華經。

說法退去回向

謹み敬て講讚し奉る轉妙法輪一座。鳩る所の功德、南無釋迦牟尼佛、南無高祖日蓮大菩薩等、證知照鑑し給へ。

仰ぎ願ば、一天四海皆歸妙法命法久住。朝野遠近同歸一乘。緇素貴賤悉期成佛。今上皇帝寶祚萬歲。天下泰平國土安穩ならしめ給へ。又此功德を以て、沙門某一會聽法の四衆と、盡未來際互に主伴となり。妙法を傳持し、八相成道の威儀を整へ。三身圓滿の大果を現じ、疾く道場に赴て、阿耨多羅三藐三菩提を得。大法輪を轉じ、大法の鼓を擊ち、大法の螺を吹き、大法の雨を降らし、普く群生を導て、俱に佛知見を開き、同く妙法蓮華の臺に座して、共に常寂光の都に遊ばん。南無妙法蓮華經。今身より佛身に至るまで能く持ち奉る南無妙法蓮華經。三返

祈禱言上略要

南無平等大慧一乘妙法蓮華經。南無久遠實成本師釋迦牟尼佛。南無寶淨世界證明法華多寶如來。南無上行、無邊行、淨行、安立行等本化地涌の大士。總じて靈山虛空二處三會發起影向當機結緣の四衆、乃至盡虛空微塵刹土、古來現在の一切の三寶に申して言く、願ば讀誦し奉る壽量品を以て助行とし、唱へ奉る妙法蓮華經を以て正行と爲し、速に正助の二行を整へて之を讀誦し奉る。此の功德に依て信心の行者、除病延命ならむのみ。

其れ陀羅尼は、二邊の惡を除て中道の善に歸す。遮惡持善の者は、何ぞ惡を除て善に歸せしめざらんや。然らば則ち鬼子母神十羅刹女は、若不順我呪惱亂說法者頭破作七分如阿黎樹枝と誓ひ給ふ。佛前の御約束爭か虛からんや。故に五番神呪の力、遠くは一乘圓頓の妙理を顯し、近くは自身擁護の威勢を示す。之に依て二聖二天十羅刹女法華守護の、善神等を始め奉り、一切の諸神等、面々に法樂し奉る、隨喜せしめ給へ。仍て法味を聽聞して報恩を垂れしめ給へ。內には智慧の弟子有て、佛法の深義を覺り。外には淸淨の檀越有て佛法を久住し。法華折伏破權門理、終に諸乘一佛乘に歸せよと納受せしめ給へ。仰ぎ願ば精誠の祈願に依て、縱ひ年の難、月の難、日の難、時の難等の所來の定難を、返じ轉じて除病延壽息災延命と守護せしめ給へ。今百由旬內無諸衰患。受持法華名者福不可量。諸餘怨敵皆悉摧滅。得聞是經病卽消滅不老不死と云へり、國に謗法の音無なくんば、萬民數を減せず。家に讀經の勤あらば、七難必ず退散せしめんのみ。南無妙法蓮華經。

諸種回向文　畢

明治四十四年九月五日印刷
明治四十五年二月廿五日發行

編輯者　柴田一能
同　山田一英
發行者　東京麻布區鶴町二丁目三五　原子廣宣
印刷者　東京本所區番場町四　守岡功
印刷所　東京本所區番場町四　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京麻布區鶴町二丁目三五　無我山房
振替東京三一二二番

複製不許

29
402

020027-000-7

29-402

日蓮宗聖典

柴田一能

山田 一英／編

M45. 2

ABH-0193